

岩 溪 と 谷

1992年
冬号 1月～3月
第4号

巻頭言

何から何まで金があれば思いのままにできる今の日本。こんな現状の中、ハイキングなどの軽登山ならいざしらず、本格的登山を始めようと思う人は、少数の者しかいないだろう。よく他の山岳会の話として耳にすることは、新人が入会しないので今のままだと会がつぶれてしまう。フリークライミングのグループが会の中に出来てしまい、ゲレンデにしか行かない、などと色々な問題を耳にする。確かにアルパインクライマーを目指す者が減少していることは事実だと思うが、しかし少数ではあるが本格的な登山を夢見ている若者も確実にいるはずだ。この少数の人間をいかに集め、山岳会の規格にあった会員に育てていくかが今後の我々の課題だと思う。それには、よその山岳会にない特色を強く出して行動していくことが大切ではなかろうか。幸い当会においては、アルパインクライミングだけで行こうという意識が会員の中で強いので心強い限りである。新人が技術や体力の向上過程での縦走やフリークライミングは大いにやるべきだと思う。最近のアルパインクライマーは5, 10ぐらいのレベルには達しなければだめだと思う。しかしゲレンデ通いばかりでは困る。我々は、四季を通じての岩壁登攀を最終目標としたいものだ。

オールラウンド登山を口実に、ハイカーからクライマーまで多くの会員を集め、ろくに山にも行かない会長がその上にあぐらをかく様な山岳会には絶対したくないと思っている。俺がACC・Jに入会した当時は会も全盛期であり、全員、より困難な登攀を目指していた時期であった。あの頃のACC・Jは、たくましい野武士の様な集団であった気がする。俺は、野武士のような集団を山岳会の理想だと思いこんでしまっている。「かつてに思い込んでいるだけです。」

ACC・Jの先輩達が築いてくれた伝統も最近は、一部薄れかけてしまいそうな気もしている。技術や装備も今より悪い時代にアルプスの主要ルート（アイガー北壁、マッターホルン北壁、グランドジョラス北壁、ドリュー北壁、ピッツ・パディーレ北壁、クルト北壁、ドロワット北壁）などを、登った先輩達や、故中野融氏のように、グランドジョラスの中央クロワールやドロワット北壁クジールートの冬季初登攀などを行った人もいたことを今後の各自の励みとするためにも覚えておいてほしい。会員各自が目標を持ち努力すれば、必ず先輩達を超えることが出来るはずだ。最近新人も入り、会にまた活気が出てきたような気もする。力を合わせて共に困難に立ち向かうことを願っている。

(ACCJ茨城代表、鯉河仁志)



本図と故中野融氏（右）

70年、プレチェール西壁ブラウンクラックにて

目次

1992年 冬号 1月～3月 第4号 ACCJ-茨城

巻頭言	...	1
集会報告	...	4
山行報告	...	5
正月合宿、西穂高北西尾根		
～3年ぶりの正月の山頂を目指して～	...	6
奥久慈一鷲の巣山	...	10
県岳連冬山救助訓練	...	12
県岳連冬山講習会に参加して	...	13
谷川岳中ゴーマ尾根	...	15
幕岩尾根に、〇〇〇〇を、見た	...	18
燕岳に登る	...	22
足尾山「氷壁登攀訓練」	...	25
八ヶ岳、阿弥陀岳南稜	...	27
中央アルプス宝剣岳西面極楽尾根	...	30
古賀志山INかんさいべん	...	34
冬の硫黄岳に登る	...	36
雨の八ヶ岳	...	37
谷川岳一の倉沢、一の沢・二の沢中間稜	...	38
幽ノ沢、石楠花尾根	...	43
とりあえず”赤岳西壁主稜”の記録	...	46
東北山スキー放浪記	...	49
編集後記	...	57

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

1月 8日

出席者 本図、菊池、鯉河、所、高田、川上、佐藤、村上、長久保、中居

1月22日

出席者 本図、生井、栗原、高田、原田、川上、佐藤、鈴木

2月 5日

出席者 本図、菊池、鯉河、中島、生井、高田、原田、川上、笹沢、中居

2月19日

出席者 菊池、所、生井、高田、原田、村上、笹沢

3月 4日

出席者 本図、菊池、生井、高田、高木、川上、佐藤、笹沢

3月18日

出席者 本図、鯉河、中島、生井、高田、原田、川上、中居



山行報告

12月31日～1月3日

西穂高北西尾根（冬山合宿）

L高田、本図、所

川上、佐藤、中居

1月12日

奥久慈、鷲の巣山

L長久保、川上、佐藤

（長久保さん歓迎山行）

笹沢、村上、本図、中居

2月 1～ 2日

安達太良山（県岳連冬山講習会）

本図、笹沢

2月 9～10日

谷川岳南面、中ゴウ尾根

L高田、原田

//

谷川岳南面、幕岩尾根

L生井、本図

2月17～20日

北アルプス、燕岳

L川上、中居

2月23日

松木沢アイスクライミング

L鯉河、生井、川上、中居

2月29日～3月1日

八ヶ岳阿弥陀岳南稜

L高田、中居

3月 7～ 8日

中央アルプス宝剣岳西面極楽尾根

L生井、本図

3月 8日

古賀志山（岩トレ）

佐藤、他2名

3月11日

八ヶ岳、硫黄岳

L川上、笹沢

3月15日

八ヶ岳、赤岳北峰リッジ（敗退）

L川上、鈴木、高木、中居

3月20日

谷川岳東面、一の倉沢一の沢二の沢中間稜

L所、川上、佐藤

//

谷川岳東面、幽の沢石楠花尾根

L本図、中居

3月28～29日

八ヶ岳赤岳主稜

L高田、原田

3月29日～4月4日

東北山スキー行

中居（単独）

正月合宿、西穂高岳北西尾根 ～3年ぶりの正月の山頂を目指して～

91.12.31～92.1.3

パーティ L 高田暢年、本図一統、所繁、佐藤文則、中居康展、川上浩史

1989年1月に霞沢岳の山頂を極めて以来、'90年明神東綾、'91杓子岳双子尾根と敗退し、久しく正月の山頂から遠のいていた。新人の中居氏を含む我々6人は土浦の協同病院駐車場に集結した。そこには原田さんが見送りにきて下さっており、何と全員分の手作りのお弁当を差し入れて下さったのである！（岩と溪谷Vol.3参照）この事が我々の励みとなり、3年ぶりの正月合宿成功への原動力となったことは言うまでもない。

さて6人は社長のハコで土浦を出発した。常磐、首都高、東名を走り抜け、国道41号線に下りて少し進むと車の燃料が減っていることに気付き、補給することになった。やっと営業しているGSを発見し、満タンにすると、なんと深夜料金100円を要求されたのだ。全員驚きを隠し得ず、開いた口がふさがらなかったが、お釣りと領収書を何度見比べても深夜料金なるものは80円しか取られて



北西尾根に立つ、所と川上

西穂高岳頂上にて



北西尾根からの奥穂高方面



いない。たぶん、バイトさんたちのガム代にでもなっているのだろう。20円を得た気分になった(?) 我々は夜が白み始めた頃、新穂高温泉に到着、仮眠をとった。

入山初日、林道をひたすら歩き、北西尾根取り付き点を探し回る。取り付きらしき場所は、クマザサが生い茂る上に雪が積もっており、いきなり腰から胸までのラッセルを強いられた。この冬は暖冬などと言われ、ほとんど雪が降っていなかったが、我々の入山の3~4日前に突如としてドカ雪となり、入山者もいないために踏み固められておらず、おまけに雪はフカフカで前進するのは大変であった。更に都合の悪いことに、天気が良かったため気温が上がってしまい、暑がりの私としては本当に参ってしまった。ただ、後方の笠が岳の雄姿に励まされ、それだけが救いだった。この日はただひたすらラッセルして登り、辺りが薄暗くなり始めた頃、適当な平地を整地してテン張った。この日は'91年最後の日ということで、年越ソバと酒が胃に浸みわたった。

一夜明けたら年も明けており、また社長の誕生日でもあるめでたい日となった。朝食を済ませ、撤収を終えて満点の星空の下、ヘッドライトをつけて歩き出す。この日もラッセルが続く。途中、急登や倒木帯などに苦しめられ、時には足が深みにハマったりしながらも1時間に100mの標高差を稼ぐ。だんだん樹林もまばらになり、尾根もやせてくると、突然森林限界を抜け、雪稜となった。時間も遅く、ガスもかかっているので今日中に第二コルに到達するのは無理と判定され、快適にテントを張れる場所まで引き返した。

一月二日の朝も、素晴らしい好天に恵まれて快適に行動開始。雪稜が続く、時々雪底を踏み抜きそうになったりしてビビる。西尾根とのジャンクションを過ぎ、第二コルに着くと、岩の出現である。ザイルを固定して登る。最終ピッチを終えるといきなり頂上に着いていた。大人数であったため、全員が登頂するのに結構時間がかかった。頂上ではガスに巻かれ、展望まるでなかったが人口過密状態で、大勢の人々がいた。その中で佐藤氏は、上半身裸の写真を撮ったらしい。

さて頂上での記念撮影後、独標方面へ下る。今までビビって歩いていたが頂上より先は一般ルートであり、踏み跡も超しっかりしているので安心して歩けた。独標直前では変な支稜上にルートをとってしまい、妙な岩峰上でミスに気付くという間抜けを演じたが、無事独標へ。小休止して、西穂高山荘方面へ足を運ぶ。独標以下はもう山というよりも丘のような地形で快適に飛ばす。西穂高山荘に着くと、ここで一泊するか下山するかで意見が割れた。そこで小屋番さんに訪ねて

みると、文明の利器はまだ動いているとのこと。そこでロープウェイで大至急下山することにした。ロープウェイの乗り場までこれまた辛い。疲れた体にムチ打って尾根を下りるが、平坦になったと思いきや登り返しが3カ所もあって大した距離でもないのに永く感じた。

乗り場でストーブを囲んで酒を飲み、下では露天風呂につかって近くのキャンプ場で一泊し、北陸道・関越道経由で帰ってきた。関東は気温が高い地方だと実感したのであった。

12月31日 新穂高温泉 8:30 - 穂高平小屋 9:45~10:00 -
北西尾根取付 10:45~11:05 - 第1幕営地 15:40
1月 1日 出発 6:45 - 第2幕営地 15:30
1月 2日 出発 6:45 - 西穂高頂上 11:45~12:10 - 独標 13:00~20
- 西穂高山荘 14:05 - ロープウェイ駅 14:50

(川上 記)



奥久慈一鷲の巣山

92. 1. 12

パーティ L 長久保加寿子、本図一統、笹沢ひろみ、中居康展、川上浩史
村上晴美、佐藤文則

ACCJに入会して初めての山行が鷲の巣山であった。山頂が標高402メートル程度の山であるが、私にとってははれっきとした山登りとなった。(今回の山行のメンバーは、私を入れて7人であったが、私以外の6人にとっては日頃の山行に比べると、なんとも手ごたえのないと思うような、朝飯前のお遊び程度のものだったのではないだろうか)

今回の山行では、山登りそのものよりも他の部分で感動したことや、おかしかったことなどがあり、それらが忘れられず、いい思い出となった。

一番印象に残っているのは、山頂であったかいラーメンを食べたことであった。それも野菜入りの……。こんなにおいしいラーメンを食べたことがあっただろうかと思うほど(お世辞じゃなくて)、あれがまたおいしかったのである。食事はおいしいし、景色はいいし、空気はおいしいし、まさに言うことなしとい



頂上でのスナップ

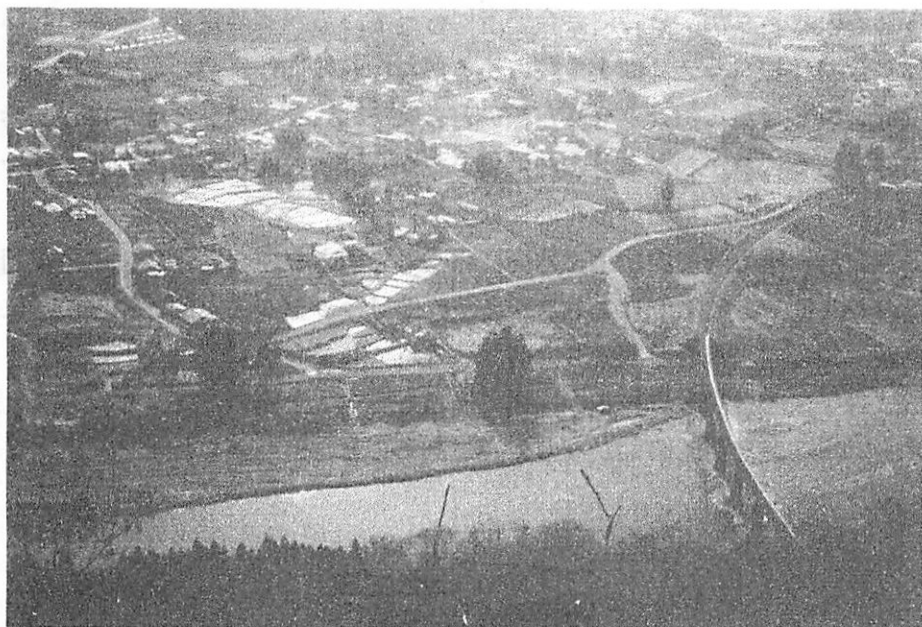
う感じであった。まあ、しいて言えば、腰を下ろしたところがデコボコしており、お尻が少し痛かったことが、ちょっと問題であったが・・・。

また、熱いコーヒーをいただいたのだが、これがまた”風呂あがりのビールは最高”と同じような感じなのである。コーヒーなんて常時飲んでいるようなものなのに不思議なものである。

他に強烈な印象として残っているのが、袋田温泉での出来事である。山行の後に入れるようにと本図さんが前もって袋田温泉の露天風呂に予約をしておいてくれたのである。そこで目的地に向かい、無事到着したのだが、露天風呂への入り口がわからず困って、道路を行ったり来たりしていた。すると、かなり遠くにはあるが、裸婦が数人見えるではないか。それもかなり年輩の婦人達である。それにはみんな哑然としてしまい、驚きやら何やらで結局風呂に入らず帰ってきてしまった。

こんな感じで、第1回目の山行は無事終わったのである。

(長久保 記)



鶯の巣山からの眺め

県岳連冬山救助訓練

92. 2. 1~2. 1

参加者 本図一統

1月31日夜、早めに家を出る。外は雪が降っているが道路にはない。真岡まで行った頃、ラジオで東北道が一部通行止めになったことを知る。おそらく4号国道を行ってもすごい渋滞だろうから土浦まで引き返し、常磐道で行くこととする。土浦北インターの近くまで来たところ、今度は常磐道も日立南太田インターと日立北インターの間が通行止めだという。何てことだ。不通区間だけは6号国道を通り、あとは常磐道で行く。路面には雪が積もっており、かなりスリップしやすい状態であったが、そこは4WD+スタッドレスの強み、バンバン行く。二本松から岳温泉への道は新雪が30cmくらい積もっており、これをラッセルしながら快適に進む。新雪を蹴散らしながら車で飛ばすのもかなり気持ちの良いものである。笹沢さんの泊まっている民宿の前に車を止め、ビールを飲んでシュラフに入る。

2月1日早朝ラジオを聞くと、常磐道も東北道も完全ストップ。今日は皆さん来られるのだろうか。9時に集合場所に行ってみるが案の定まだ来ていない。結局我々救助訓練パーティは11時にくろがね山荘に向け出発となる。ポート搬送は試行錯誤しながら、ラッセルが深いときは一列になってひっぱるのが一番能率がよいということがわかる。山荘に着いてからは、人間を雪中に埋めてソンドの訓練、屋内では救急法の講習をおこなった。

2月2日、雪の降る中、頂上方面にポートを引きながら進む。途中急斜面でのトラバースやその他の訓練をおこなう。帰路はラッセルのため、思うようにスピードが上がらず、集合時間より2時間も遅れてしまった。

私は去年スキーパトロールの関係で何日もポートを引いたが、ゲレンデと違って、山でポートを引くのはかなり大変であることを再認識した。

(本図 記)



県岳連冬山講習会に参加して

92.2.1~2

参加者 笹沢ひろみ

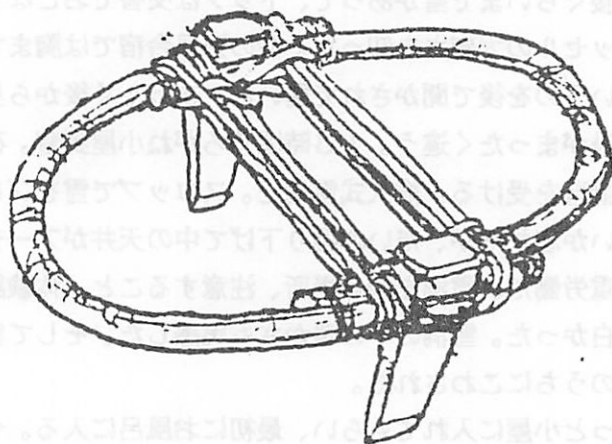
岳温泉中心部にある民宿の二階で一人やや緊張した朝を迎える。早朝から何とも騒々しい音も手伝って、目覚まし時計もないのに早起き。窓をあけて驚いたことに街中がどっかり雪で埋もれて白一色。本図さんのデリカも雪で重たそうになっている。民宿でリッチに朝食をとり8時30分除雪で活気づいた温泉街をを出発し、あたらすスキー場へと向かう。大雪で道路状況も悪いらしく、開講式がおくれ、10時山岳登攀の受講生、指導者約25名はくろがね小屋へと出発する。雪も止み曇空。最初はつぼ足、途中小休止して、わかんの装着方法、歩き方を学ぶ。足が重くて歩きにくいし、ひもがゆるんでとても憂鬱な気分だった。ラッセルはひどい所では腰ぐらいまで雪があって、トップは交替でおこなった。トップをやって初めてラッセルの大変さを知った。会の正月合宿では胸までのラッセルを一日中続けたというのを後で聞かされて驚いた。まったく後から歩くのほど楽なものはない。呼吸がまったく違う。16時頃くろがね小屋到着。荷物をおろし、すぐ雪洞構築の講習を受ける。縦穴式雪洞だ。スコップで雪をブロック型に切り出す。何mくらいか忘れたが、だいふ掘り下げて中の天井がアーチ型になるようにくりぬいた。重労働だ。雪洞を掘る場所、注意すること、体験談をまじえた説明は興味深く面白かった。雪洞の中の暖かさを実感した。そして宿泊希望者のいない雪洞は一瞬のうちにこわされた。

17時、やっと小屋に入れてもらい、最初にお風呂に入る。今回の女性の受講者は7名。山のいで湯に芯からあたたまる。ありがたい。白濁したあつめの湯は鉄の香りがしてなんとも風情がある。夕食後、山スキー、救助訓練の人たちも集まり全員そろそろ。今日は会話量がいつもより少ない。本図さんに会って多弁になる。日本酒も心地よくまわっている。ロープワークの屋内講習を終え、消灯。

翌日は吹雪いていた。小屋から20分ほど登ったあたりで雪訓。傾斜のある斜面を選び、グループ別に指導を受ける。アイゼン装着して登り方、下り方、トラバース(斜めも)、重心のかけ方、姿勢と体の向き、ピッケルのさし方…。軟雪でアイゼンがすぐだんごになる。斜面で大きな菱型を描くよう5人は一列で進む。耐風姿勢、滑落停止についても学んだ。一通りの指導を受け、早めに小屋に

戻る。昼食後昨日来た道に戻る。時々強風が吹くと、人の足跡がスーッと消える。超苦手なわかんをはき、遅れがちに進む。相変わらずひもがゆるみひっかけて転んだり、結び直したりと苦勞した。スキー場到着後閉講式をすませ、救助訓練の本図さんを待つ。派手でにぎやかなスキーヤーにうもれ、有意義だった2日間をボーッと回想していた。今度はカリカリした所での雪訓をしたいなァ。よろしくお願いします。

(笹沢 記)



谷川岳中ゴ一尾根

92.2.9~10

パーティ L 高田暢年、原田真由美

2月9~11日の3連休を利用し、我々高田、原田パーティは中ゴ一尾根、本図、生井パーティは幕岩尾根に入った。

2月8日 23時下館を出発。谷川温泉に車を止め、仮眠をとる。

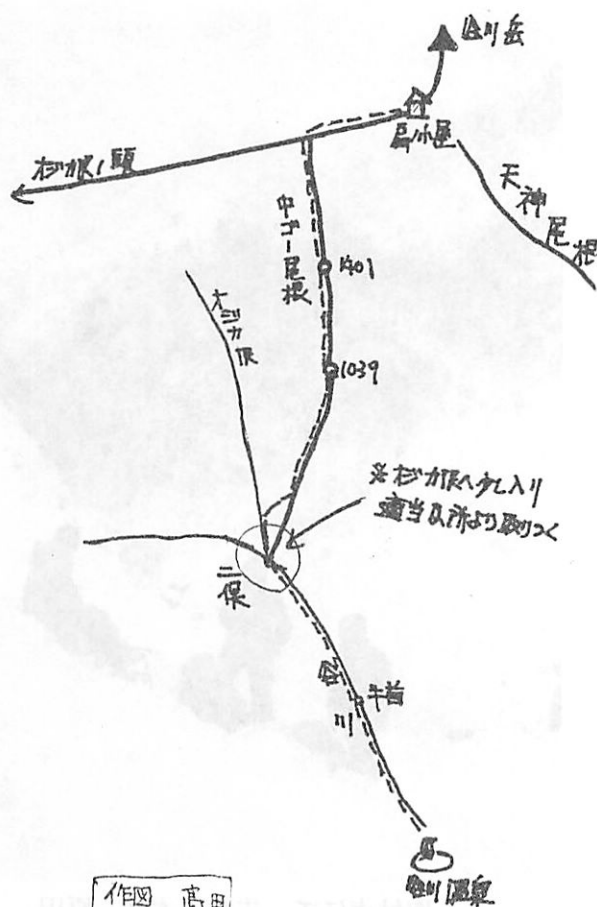
2月9日 7時起床。天気雪のち晴れ。

この天気では、今日は停滞かと思ったが、とりあえず二股を目指し出発する。もしラッセルがひどく、初日二股までが限界であるようであれば、引き返すしかないと話していたが、いざ出発してみると割と新しいトレールがあり、二股まで3時間弱で着いてしまった。

我々はラッセルを考えわかんを持って行ったが、この後もラッセルはなく、結局わかんは無用の長物となった。(ラッセルはあった)

二股からオジカ沢の方へ少し入り、ここで行動食を取り13時。幕岩尾根パーティと別れ、まず稜線を目指し、雪の斜面をピッケルをつきながら、時にはブッシュをつかみながら強引に登っていく。ときどき反対側の幕岩尾根の方を振り返ると、本図さんと生井さんが稜線を目指しているのが豆粒のように見える。

2時、稜線に出る。ここからはひたすら上を目指し、



時々トレールが見え隠れするルートを行く。3時適当な斜面を整地し、ツェルトを張る。時々幕岩尾根パーティからコールがかかるが、こちらからは向こうは確認できなかった。今回は計量化を図るため、シュラフは夏用のものを持って行ったので、寒いのは覚悟していたが、とにかく寒かった。原田さんは冬用のシュラフを持ってきていたので、全然寒くなかったらしい。とても寝ていられる状況ではなく、朝4時と同時にシュラフから出て、コンロに火をつけた。原田さんはシュラフの中の方が快適らしくなかなか出てきてくれない。

6時30分出発。アイゼンを着け、よくしまった雪稜を行く。天気は快晴無風。右手に天神平スキー場や天神尾根に登っている登山者がよく見えた。

特に難しい所もなく、快適な山行であった。11時55分、国境稜線に出る。ここで無線交信をするが、向こうは今ナダレそうなところを行動中であるため、再度1時間後に交信することにし、肩の小屋を目指す。13時、肩の小屋にて無



取付点にて、生井、本図、原田

線交信。私の予想では、幕岩パーティはもうワンピバーク、肩の小屋でするものだと思っていたが、なんとヘッドランプをつけてでも西黒尾根を下ると言うではないか。我々は天神平のロープウェイに間に合う時間だったので、天神尾根を下り、15時天神平に着く。ここでビールで乾杯して、ロープウェイで下り、水上までバスで行き、更にTAXIで谷川温泉の車の所まで行き、車を天神平ロープウェイ駅まで持って行き、ラーメンを作り食べたりしながら、幕岩パーティの帰りを待つ。

駐車場には我々の車の他に1台だけ車があったが、やがて男性2人パーティがヘッド

ランプをつけ戻ってきて、そそくさと後かたづけをすませると帰っていった。結局我々の車だけになったが、無線機で西黒尾根を下っている途中であるのは判っているので心配はない。原田さんは車の後ろで完全熟睡状態に入っている。私も少しウトウトしていると、車の外で「ドサッ」という音で目を覚ますと、本図さんがザックをおろしていた。本図さんに「生井さんは？」と聞くと、「生井はバテちゃってよ。少し遅れてくるよ」

時計を見ると20時過ぎ。バテないほうが異常である。数分後、生井さんも無事下ってきた。さすがに疲れた様子であった。2人は行動食もろくにとらずに行動していたみ

たいで、「腹へった」を連発し、適当なレストランを見つけ食事をとり、そのまま下館へ直行し解散となった。



幕岩尾根をバックに、高田

(高田 記)



幕岩尾根に、〇〇〇〇を、見た！

92.2.9~10

パーティ L 生井一男、本図一統

1992年、2月9日から11日の三日間の予定で、中ゴー尾根と幕岩尾根に分かれてアタックを決行した。

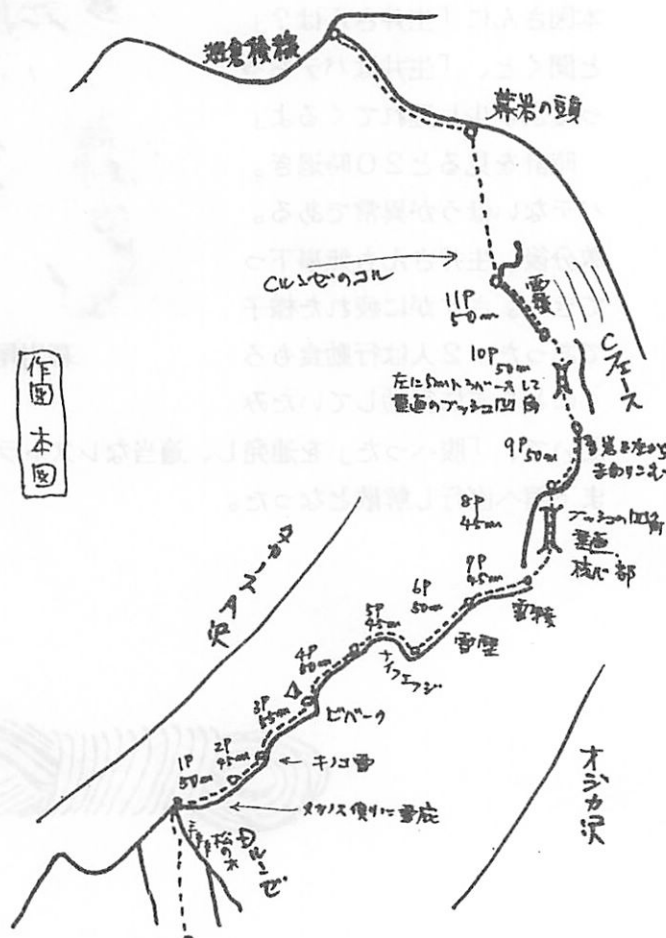
八日の夜、下館に十時に集合して、目指す谷川岳にむけ進路をとる『いざ！出発』。今回のパーティ編成は、中ゴー尾根隊が、高田、原田の両君。そして我が幕岩尾根隊は〔谷川仙人〕こと本図さん、そして私〔浮遊霊〕生井の四名である。

その四人組が、入山口である谷川温泉に着いたのは、午前二時過ぎであった。まずは駐車場を探し、車を止める。早速、恒例のビールで乾杯！ 少しほろ酔いになったころ仮眠態勢にはいった。

朝、起きて見ると、バンバン雪が降っていた。

『ありやうや！こんなに降ってるのに？やっぱ行くだろうな』…と独り言をつぶやきながら、朝飯を済ませて、山行の支度をする。まずは車で入れる所まで入ってから、車を捨て二俣を目指し出発した。（午前八時半過ぎだったと思う）

天気の方は、大分良くなってきた…。（顔がやけそうだ）二股までラッセルを交替しながら進み、12時40分に到着した。ここで、中ゴー尾根隊とは暫しの別れである。互いに堅い



握手を交わし、登山開始だ。

まずはオジカ沢より、尾根の松の木を目指しルンゼを詰めて行く感じた・・・。
登り始めの斜面は、急登だわ、ラッセルは深いわで、大汗かき魔になってしまった。
大汗をかきながら、どうにか尾根にたどり着く。早速ビバークサイトを探す
が、見当たらない。仕方ないと観念し、ザイルを付け、サイトを探しながら→登
攀開始だ。（登攀と言うほどのものではないのだけど）

三ピッチ目に、二畳位のテラスを発見！ 日も傾いてきているので、ハイピ
ッチで、ビバーク態勢の支度に入る。

今回の本図さんは、夏用のシュラフなので『寒い！寒い！』と言っていた。結
構辛かったようだ。俺の方は、三期用なのと、日々の耐寒訓練の賜物でぐっすり
と眠れた。

二日目、すがすがしい朝を迎える。今日も、天気は、良さそうである。今日中
に下れるだろうと、安易に考えてしまった。しかし、これが苦難と苦汁に満ちた
一日の始まりだとは誰が思っただろうか？

今日の出だしは、まず本図さんがトップで行く。出だしから、ブッシュまじり
のなお且つ、木登り有りの雪稜だ。本図さんの得意中の得意のパートである。ま
るで水を得た魚のごとく、スイスイ登って行く。とても人のなせる技ではない。



ナイフエッジをラッセルする生井

俺は、あまり得意なパートじゃない。まだここいらあたりは序の口で、何ピッチ目だか忘れたが、やはり本図さんがトップの時に、藪尾根の急登だったと思う。雪はふかふかな所と少し堅い所とがミックスしていて、踏ん張りが効かない登りづらい所で、木は邪魔になるわ、斜面は急だわで。

『本当に、こんなとこ良く登って行けるな全く』とブツブツと独り言を言いながら登っていく。ザイルが通っているんでその通りに行かなくてはならず、雪の斜面登りと言うよりは殆ど木登りだ！ その登る後ろ姿を見ていたら、ふと私の頭の中で、伝説の世界に出て来る『ヒバゴン』のイメージが湧いてきた。今まで本図さんとの山行が一番多かったのが分かるのだが、『ある時は、カモシカ、ある時は、カワウソと変化して、今回は、ヒバゴン、しかしてその実体は？』…もしかして、本当に仙人か何かじゃないかと思うことがある。

そんな事を思っていると視界が開け、雪稜になった。最初は、ナイフエッジ状になっていて、本図さんが（冗談だとおもうけど）『怖い～怖い～』と言いながら登って来る。結構、雪庇も発達してるしで面白い。

ここまで来るとかなり上部まで来た様で、もう肩の小屋が見える。お隣の中ゴ一尾根隊も上部の方まで登って来ている。ここから見ると、登り詰めたら肩の小屋に出ようである『楽そうだなあ～いいなあ』と思っていると尾根は、急に広くなって来た。ここでザイルを解いて登るが、今度は二、三步登るとアイゼンに雪がダンゴになって、まるで『花魁』の下駄の様に高くなって、重いこと重いこと。そのせいか俎倉の稜線までが遠く感じた。……余りに遠いので、脳裏にあのモンブランの頂上直下での辛い登りが蘇ってきた。『もう！たくさんだ、こん畜生』とフウフウしながら、午後二時に俎倉の稜線に着く。さっきは目と鼻だった『肩の小屋』が、遠く行ってしまった。『ア～ア～！』

今度は国境稜線までの登りだ。これまた辛い一言。やっとの事で、ようやく国境稜線にたどり着いた。疲労度は、二人とも互角かと思った私が馬鹿だったのだが。国境稜線に出たら、本図さんのピッチが上がって、脱兎のごとく早い。みるみる距離が開いてしまう。『全く、今度は一体何に変化したんだろう？ もうあの人には付いていけない。もうどうにでもなれ』と投げやり状態で、どうにか午後五時過ぎに、大分遅れて肩の小屋にたどり着く。

休憩をいれず、西黒尾根の下降に入るべく下って行く。本図さんの姿は、雪上には見えない。その姿を見たのは西黒の入り口の所で、『さ～て』と下降しようかとしている時に、ふと雪の中から首を出してきて、俺を探しているようだ。

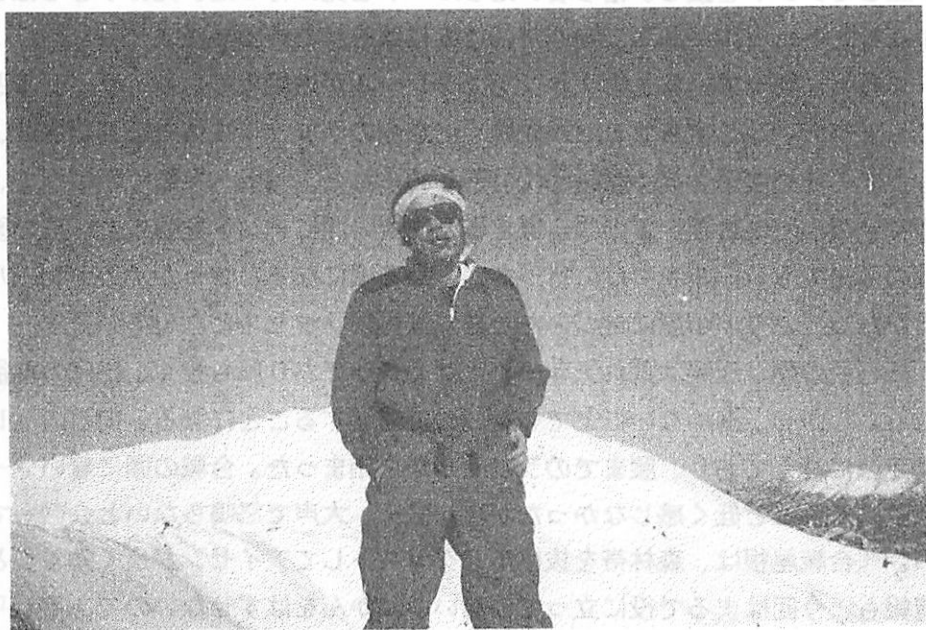
『ハハ～ン！さては、ここは、間違って天神平の方へ行っちゃい易いので、心配になって見にきたな！ ありがとさん』。ここからは、つるんで下る。それでも登山指導センターの見える辺りで、また遅れてしまった。下には早く降りた中ゴ一隊が車を回して待っている。本図さんに遅れること10分後の午後8時20分に、車に到着した。

こうして苦難と苦汁に満ちた一日が終ったのであった。そうして予定より一日早い帰途についた。

2月9日 谷川温泉 9:10 - 二俣 12:00 - 中ゴ一隊との別れ 13:00
- 幕岩尾根上 14:40~15:00 - ビバーク地 16:20

2月10日 出発 7:00 - Cルンゼのゴル 11:00 - 幕岩の頭 13:00 -
組倉稜線 14:00 - 肩の小屋 17:00~30 -
土合ロープウェイ駅 20:10

(生井 記)



組倉稜線に立つ本図

燕岳に登る

92.2.17~20

パーティ L 川上浩史、中居康展

大装備を背負い、二人は土浦駅に落ち合う。せっかくの春休みだから動かなくては大損である。実はこの計画は冬合宿中に持ち上がり、一度ボシヤったが、長久保さん歓迎ハイクの時に急浮上したものである。それは実に遠大な計画であり、中房温泉から大天井岳を経て、槍が岳に至り、更に横尾尾根下降とするものであった。

新宿から空いている急行アルプスで穂高駅へ行き、出発準備をする。準備完了し、電話でタクシーを呼ぼうとしたら、駅前営業所へ行って運転手を起こしてくれと言われた。タクシーは中房温泉手前16kmまでしか入らない。舗装道路をただひたすら歩く。最初林道を軽く見積っていたが、認識不足を改めて感じさせられた。これが長いのだ。トレールがあったから良かったものの、かなり時間をくってしまい、中房温泉に着いたら私はクタクタってしまった。バテたため、先進を中止してテントを張る。落ち着いたらルートを見に行った。充分すぎるほどハッキリしたトレールがある。安心だ。この日はそれで終わった。

二日目。登っていると第1ベンチでトレールが途絶えており、ラッセルとなってしまった。ひたすらラッセルが続く。急登のラッセルは体力を消費させ、天候もガスのため展望もなく意気消沈で苦しめられた。ヘトヘトにくたばって、ようやく合戦小屋に着き、夏のゴミ置き場と便所の間にテントを張った。その後、合戦の頭までトレールをつけに行ったが、帰る頃になるとせっかくのトレールが消えかかっており、小屋に近づいたときには再びラッセルとなっていた。

三日目の朝、天候は荒れ気味で、上はガスっており風も強く、出発の意欲も薄れる。しかし、進めないほどでもないので前進することになる。前日のトレールは完全に消えており、腰までのラッセルから始まった。合戦の頭に着いて一休み。気温はそれほど低く感じなかったが風が強く、大声で怒鳴らないと会話もできない。「合戦尾根は、森林帯を抜けるとクラストしてアイゼンが良く効く」という情報も、今回はまるで役に立っていない。わかんをはずせないのである。平坦な尾根をひたすらラッセルする。途中、会話が交わせる程度に風はやわらいだ。主稜線に近づき、尾根が最後の登りになっている辺りになると、やせてきて、キノ

コ雪のような状態になっている部分もあり、前進にはパワーがいる。結局、燕山荘に着くまでわかんを外すことはなかった。冬期小屋に入って一服。小屋の中にテントを張って休む。しばらくして、私の右の耳が凍傷になっているのに気がついた。

二時間ほど経過したら、ガスが晴れており、西側はまるで見えないものの東側が素晴らしく晴れわたっている。そこで燕岳頂上を目指してアタック開始！ 主稜線はラッセルが全くなく、快適にアイゼンが効く。30分程で燕岳の絶頂を極める！ 槍方面が見えなかったが、東側は良く晴れている。記念写真を撮り、小屋へ戻る。この日、夜6時に鈴木さんと無線で連絡をとる。鈴木さんは、著しく遅れていることを知り、驚いていた様子だった。この日は集会があったのだが、当然のことながら参加できなかった。「公欠」扱いになっている事を望む(?)。

四日目の朝はガスが濃く風も強かったのだ。先へ進んだとしても予備日はもう一日も使えなくなってしまう、行っても引き返してくることが目に見えていたので、しかも耳が凍傷になったこともあって下山となる。下山時、主稜線から下り始める所はアイゼンを使ったが、平坦になっている所ではわかに換え、下山でもラッセルである。大汗かきかき降り続けると、合戦小屋の直下で大学生アベックが登って来ていた。すれ違った所でわかんを脱ぎ、そいつらのトレールをひたすら下る。実質3時間で中房温泉に戻れた。

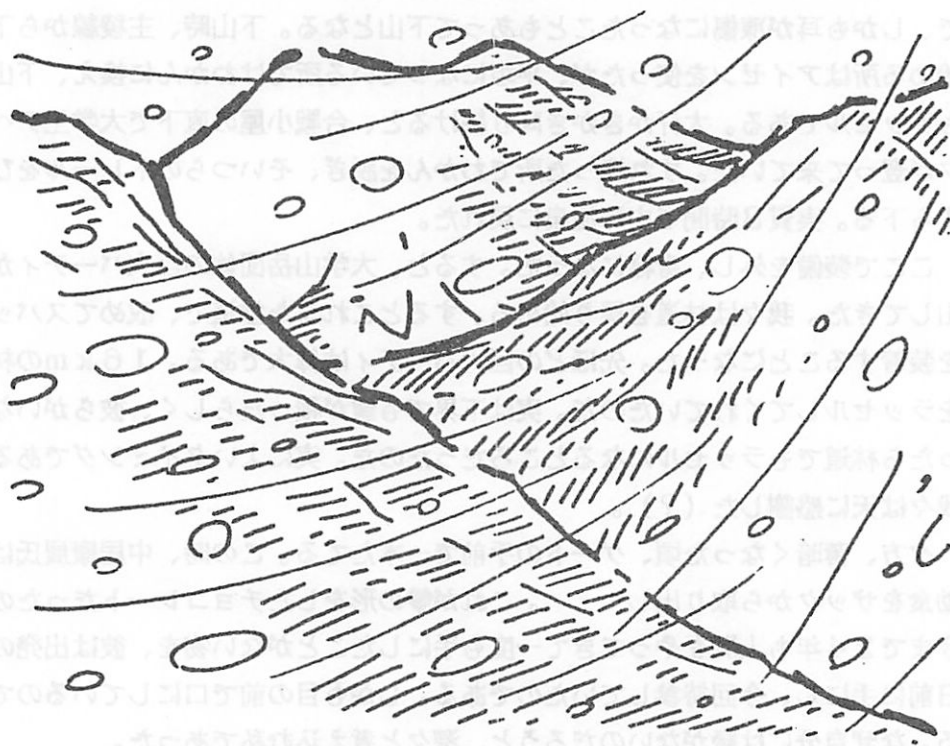
ここで装備を外し、身軽になった。すると、大学山岳団体の巨大パーティが入山してきた。我々は林道に戻り始める。するとこれまた雪道で、改めてスパッツを装着することになった。先ほどの巨大パーティは偉大である。16kmの林道をラッセルしてくれていたのだ。実は下界でも雪が積ったらしく、彼らがいなかったら林道でもラッセルになるところだったのだ。実によいタイミングである。我々は天に感謝した(?)。

夕方、薄暗くなった頃、ゲートの手前で一本たてる。この時、中居康展氏は行動食をザックから取り出し……。これが♥の形をしたチョコレートだったのだ。今まで24年も人間をやってきて一度も手にしたことがない物を、彼は出発の数日前に手にし、今回持参していたのである。しかも目の前で口にしているのである。なぜ自分には縁がないのだろうと、深々と考え込む私であった。

林道のゲートに着くとタクシーを呼び、松本で酒を飲んで(浴びて?)、夜行で帰った。今回の山行は反省点も多く、もう一度磨き直す必要があることを痛感させられた。

2月17日 林道ゲート 6:10 - 信濃坂 9:00~20 - 中房温泉 11:10~13:45
 偵察引き上げ 14:10 - テント 14:25
 2月18日 出発 6:05 - 第二ベンチ 8:20~30 - 合戦小屋 14:10~45
 - 合戦の頭 15:20 - 合戦小屋 15:40
 2月19日 出発 7:10 - 合戦の頭 7:45~8:10 - 燕山荘 10:55~13:50
 - 燕岳 14:20~30 - 燕山荘 15:00
 2月20日 出発 8:00 - 中房温泉 11:30~12:15 - 林道ゲート 15:47

(川上 記)



足尾山 『氷壁登攀訓練』

92.2.23

パーティ L 鯉河仁志、川上浩史、中居康展、生井一男

『ジリジリ〜』と電話のベルがなった。どうもあの鳴り方は、本図さんかなと思って出てみると、案の定、そうであった。最近では電話の音で誰だか分かるようになって来た。

『足尾の氷登りなんだが、お前行くんだろう、どうだ!』との声。

『あれ?この間の集会じゃ俺しかいなかったから、お流れじゃないの?』と私。

『あなの、川上と中居が氷登りに行きたいらしいんだ、あと鯉河大先生も行くから、下館に十時にあつまろうや』と本図さん…。

とパッパと決まり、当日の夜、時間どうりに下館に集まるが、しかし本図さんの姿が見えない。『あれ?本図さんは、』と鯉河さんに聞いてみると、どうも風邪で寝込んでしまったようだ。私は一人心中で、珍しいこともある

『まあ!俗に言う、{鬼の霍乱}てやつだな』と思った。ともかく、鯉河、川上、中居、生井の四人で足尾に向け出発した。

氷登りは、かなり久しぶりなんで緊張する、現地について少し迷ったが、どうにか目的地の氷壁について身支度を整える。もう先客がいて練習をしている。

まずはトップロープのセッ



鯉河大先生のデモンストレーション

トをすべく、私と鯉河とでカツ、カツと登る。準備完了！ 下で確保を交替しながら楽しく練習する。川上、中居は初めてだろうか？ ずり落ちたり、二～三メートル吹っ飛んでいる。そうしていたら、後続のパーティの奴が、あれはバナナピックのやつかな、簡単に登っていく。やっぱり氷登りは道具だと痛感した。

しかし日が差さないなので、寒いこと寒いこと。十分に練習出来たので、もう少し立っている長い30メートル位の場所に移動し、トライする。ここは、かなり氷も緩いで来たのか？ ピッケルとパイルの入りが良いのか、なんの不安もなくスイスイ登れる。川上も中居も大分慣れたのか余裕であがってくる。

その上には、かなり垂直な40～50mはあろうか？ 登攀意欲をそそる氷壁が聳えていた。気を良くした川上が、『中居くん。今度来るときはあそこを登ろう』なんて事を言っていた。そうして、四人とも十分氷登りに満喫して、家路に着く為に足尾の山をあとにしたのであった。

(生井 記)



左から、中居、川上、生井、鯉河

八ヶ岳、阿弥陀岳南稜

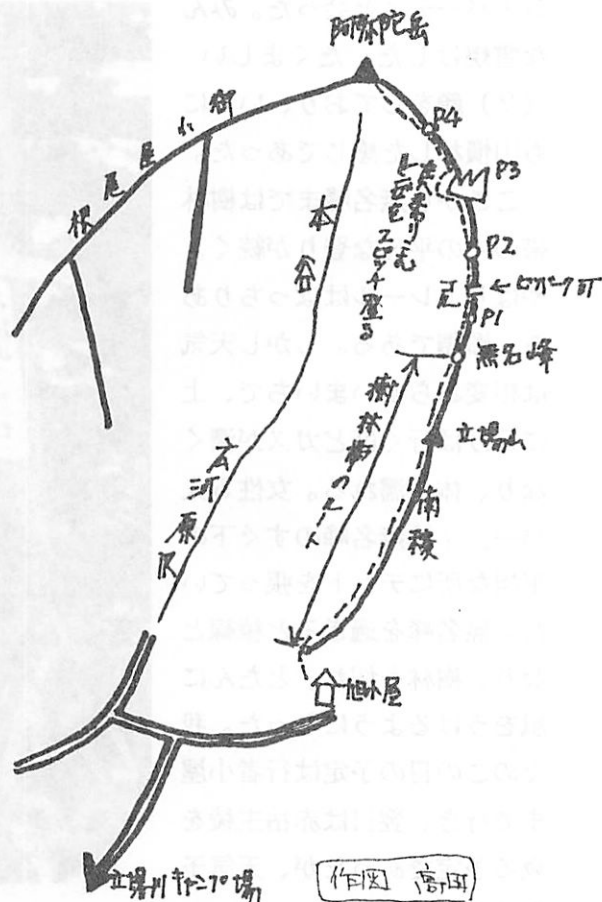
92.2.29~3.1

パーティ L 高田暢年、中居康展

正月合宿も終え、1月、2月は軟弱な私はつついスキー場に足が向いてしまう。スキーは楽しいと思う。別に重荷を担ぐわけではなく、寒いテントの中で寝るわけでもなく、つらい急登を延々登るわけでもない。しかし楽しいだけである。2月も下旬にもなるとぼちぼち山に行きたくなくなる。(実際は金が底をついたのかもしれない)

そういえば今年はまだ八ヶ岳に行っていない。2日くらい使ってどっか登ってみたいと思いながら「日本登山大系」を読んでいると、阿弥陀岳南稜が目についた。特に難しいところもなく、快適そうなバリエーションルートである。ルートが決まればあとはパートナーと日程である。日程は2/29、3/1の2日にしよう。パートナーは誰が空いているかと考える。本図さんの名前が浮かぶが、本図さんの場合既にこのルートは何年も前に登っている。あと空いていそうな奴はいないかと考える。「そうだ。中居がいた!!」 そう言えば奴は前の集会で八ヶ岳に行きたいと言っていた。早速彼に電話をすると、思ったとおり「OK」との返事が返ってきた。

2/28 週末だということに残業を強いられるが、適当



な理由をつけ20時頃会社を逃げるように抜け出す。他の連中はまだ残業をしている。こいつらは、他にすることがないから残業をしているさみしい連中だと思いながら帰宅し、中居の所に電話をすると、奴もバイトから帰ってきたばかりだということで、協同病院の駐車場に21時頃集合することにする。2人だとこんな時は便利だ。早々に着替え、ザックその他の装備を車の中に投げ込み、「すき家の牛丼」を食べて集合場所へ向かう。

途中、首都高速のいつも通りの渋滞の他は順調に行き、立場川キャンプ場の少し先の車止めの所までいく。車の中でビールを飲み仮眠を取る。

2/29 6時頃起床。天気くもり。天気予報通り、天気はあまりよくない。曇っているせいかわかりませんが寒くもなかった。

まず旭小屋を目指す。さすが積雪期人気ルートだけあり、トレールはばっちりである。旭小屋まで1時間半位で行く。ここで一本取る。初めて我々以外の女性5人パーティと会った。みんな雪焼けした、たくましい(?)顔をしており、いかにも山慣れた感じであった。

ここから無名峰までは樹林帯の中の平凡な登りが続く。やはりトレールはばっちりあり、順調である。しかし天気は相変わらずまいちで、上に行けば行くほどガスが濃くなり、体が濡れる。女性5人パーティは無名峰のすぐ下の平坦な所にテントを張っていた。無名峰を過ぎると稜線となり、樹林も切れ、とたんに風をうけるようになった。我々のこの日の予定は行者小屋まで行き、翌日は赤岳主稜を登る予定であったが、天気予報は明日もよくない。



立場山にて、高田

P1を通過し、広い鞍部につく。時計を見ると13時。時間的にはまだ余裕があるが、これより先は核心部となり、行者小屋までツェルトを張れそうな所はありそうもない。天気もよくないし、今日無理をして行者小屋までいっても、明日、赤岳主稜を登れる可能性は極めて少ない・・・などと考えていると疲れが出てきた。風当たりの弱い所をさがし、ツェルトを張る。

3/1 5時起床。外をのそくと、やはり天気予報の通りよくない。7時出発。P2を過ぎ、P3の取付きでザイルを出し、左ヘトラバースし、ルンゼをつめる。ここ数日暖かった為か、雪のつき方が不安定で、少しいやらしい。残置ハーケンを使い途中1ピッチ区切るが、下からの風が強くなかなか声が届かない。これが何度もザイルを結んだことのあるパートナーなら、ザイルの動きで相手の動きがわかるが、中居とザイルを結ぶのは2度目であるため、少し戸惑った。天気もこの辺りから雪となってくる。

P3を越えるとP4→阿弥陀岳のピークへと立つ。9時。吹雪の中ピークで写真を撮り、ガチャ類を片付け、行者小屋へ下る。

行者小屋でひと休みをし、あとは美濃戸山荘へ下るだけなので、行動食を全部食べる。天気が悪いせいか、テントは2～3張りしかなかった。美濃戸山荘あたりまで下ると雪から雨になってきた。ここで美濃戸口までTAXIを呼んでもらい、車の所までTAXIで戻る。(料金2000円) 昼過ぎに出発したため、中央高速の渋滞にも巻き込まれず、夕方土浦に帰ることが出来た。

最後に今回の私のパートナーの中居君のことを皆さんに紹介します。彼は昨年の12月、当会に入会した筑波大の医学部の学生、つまり医者のお子なのであります。彼はラッセルが好物であり、吹雪などを伴う声の届かないような強風の中を歩いていると、顔が自然にほころんでくるそうです。(普通はこわばるはず) 今回の山行の中のP3の登りも一人でニヤニヤしていたそうです。私のような「ノーマル」な人間には、彼のような「アブノーマル」な人間は理解できませんが、今後も観察していこうと思います。また彼の変態的行動を見つけたら、この誌面を利用して、皆さんに報告します。乞う御期待。

(高田 記)



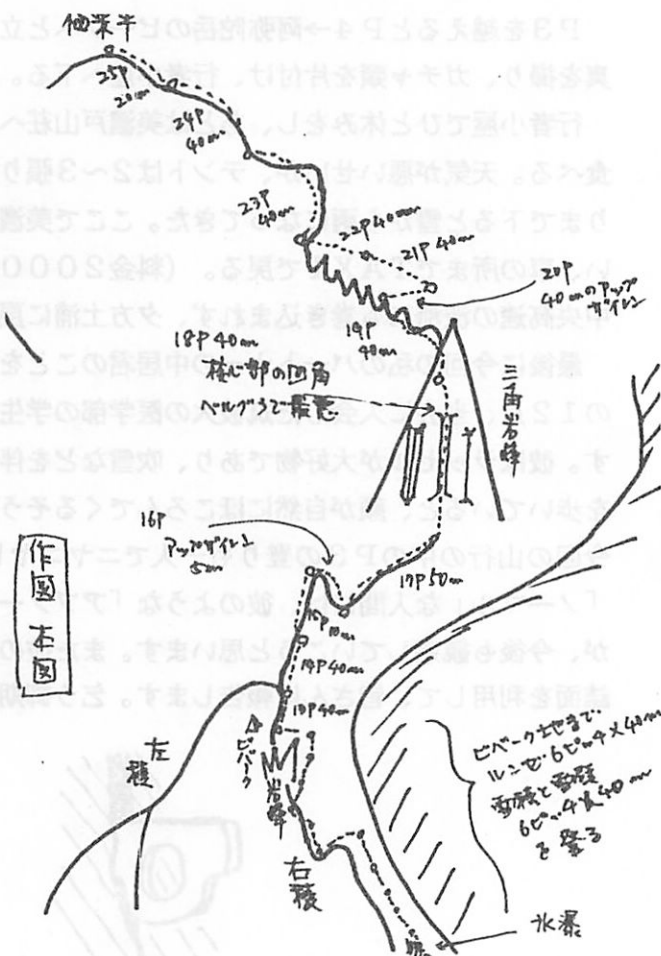
中央アルプス宝剣岳西面極楽尾根

92. 3. 7~8

パーティ L 生井一男、本図一統

3月7日快晴。千畳敷カールは、昨日降った雪がところ所に残っているが、ほとんど飛ばされてバリバリンのアイスバーンになっている。冬富士を登ったことのある者は知っているだろうが、あの冬富士のアイスバーンと同じ状態である。千畳敷ホテルからの出だしは傾斜が緩いので、靴のまま出発するが、すぐにアイゼンをつけるはめになる。東面の岩は黒々としている。何処に登るのか一パーティが取り付きに向かっていった。宝剣山荘の横で登攀用具を身につける。西面の岩は東面と違い、ねずみ色に見える。

宝剣沢を下降する。傾斜は怖いほどではないが、スリッパは絶対許されない。なぜならば、下は何千メートルの大スベリ台になっているからである。一步一步確実にアイゼンをきかして下る。B沢、C沢・・・と枝沢を確認しながら取付点と思われる氷瀑の下に出た。今回もつるべで登ることにし、生井トップで登攀開始。下部5~6mが垂直だが、あとは傾斜が落ちる40m。2ピッチ登るとルートになるはずの凹角が右手に見える。しかし、今日の状態ではとても登れそうにない。岩という岩すべての表面は2~3cmくらい



のベルグラで被われていて、ホールド、スタンスは皆無である。西面の岩がねずみ色に見えたのは、このベルグラのせいだったのだ。しょうがないのでこのままルンゼを登る。どんどん登る。何と6ピッチも登ってしまったのである。上部が開け、左手の尾根の上部に三角岩峰が見えるではないか。すると、今登っているのはF沢ということになる。道理でさきほどの凹角は登れそうもないはずだ。

左の尾根に取り付き雪稜を4ピッチ登ると20メートルくらいの岩峰の基部に出るが、この岩峰は登らず右の雪壁を2ピッチ登って巻くと、小さなコルに出た。どうやら右稜と左稜の中間ルンゼから取り付くルートは、この辺に出てくるらしい。今日は12ピッチも登ったので疲労が疲れた。ここでビバークしよう。1時間かけて雪面を切り開き、横になって寝られるほどの快適なビバークサイトを作った。

人間というものは贅沢なもので、最近ゴアテックスのツェルトばかり使っていたので、ウレタン防水の軽量ツェルトは不快に感じてならない。以前はこれがあったりまえだったのに。生井はグーグーいびきをかいて眠っている。私は寝そびれてしまいなかなか眠れなかった。いつも思うのであるが、私は河原や雪の上で寝るのが本当につらいのである。これは育ちの違いであろう。生井は水呑百姓の生

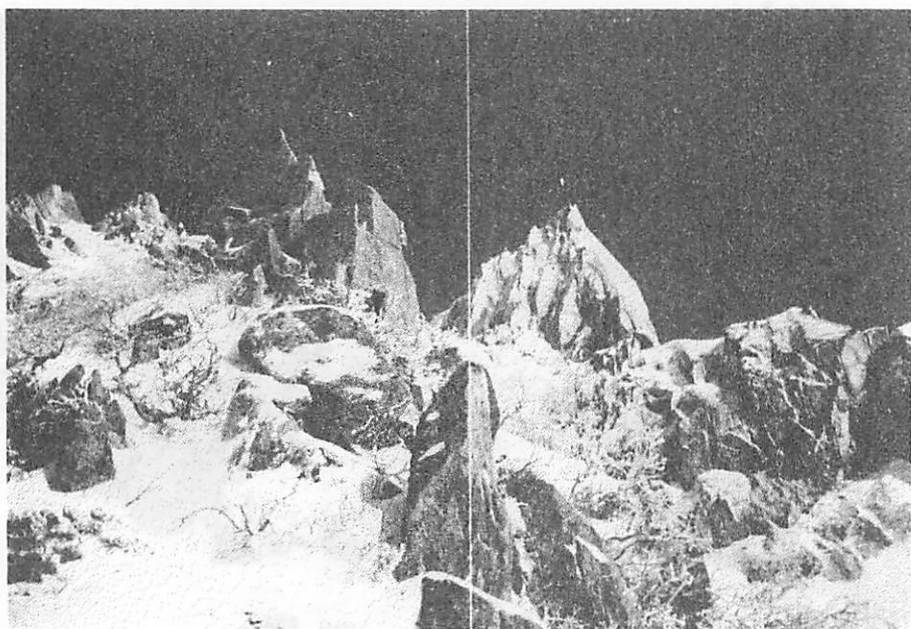


取付の氷瀑

まれで、いつもむしろの上で寝ていたので、シュラフの中で眠れるのは天国のようだという。私は大地主の大金持ちの生まれである。いつも乳母に「ボーヤ、若様」と育てられたので、シュラフで寝るのは地獄に感じてしまう。でも、この時ばかりは、この寒さの中でグーグー眠れる生井を本当に羨ましく思ったのであった。（読者の皆様は、この辺は100%信用しないこと）

生井は目が覚めると開口一番「ゆうべは眠れなかった」だと。よく言うよこのやろー。

3月8日快晴。気温マイナス15度。さすが2700メートルはよく冷えるわ。快適なピバーク地を後に、雪稜と小岩峰の登攀にかかる。3ピッチ登って5メートルのアップザイレン。狭い岩峰上での作業は意外に時間がかかるものである。さらに雪稜50メートルで核心部の三角岩峰の基部に着く。左のジェードルは登れそうにない。真上の2本の凹角のうち左側が登れそうである。登れそうといっても、例のベルグラベったりなのでホールドは皆無。相当の悪戦苦闘が予想される。生井がトップなので安心ではあるが、念のため空身になって取り付く。岩の傾斜は強く、部分的には被っている所もある。なんと岩をダブルアックスで登るのである。途中2、3カ所ベルグラの下にボルトが見えたので、これを掘り出してランニングピレーを取る。この登攀は極度の緊張を強いられ、手の感覚がない



三角岩峰

のも忘れ一気に登った。40メートルいっばいでテラスに着き、急いで両手を腋の下で温めた。本当にこのピッチは恐怖が恐かった。

ここで、トップのザックを吊り上げたザイルの末端が何かに引っかかり、回収できなくなってしまった。しばらくザイルを振ったり、引いたりして回収を試みるが果たせず、ザイルの切断を決意し、切り捨てる部分になるべく短くしようと引き上げたところスルスルとザイルが上がってきたのである。いったいどうなっているんだ！！ 今までの苦労はなんだったんだ！！ とにかくザイルは切らなくて済んだので登攀再開。

さらに5メートル凹角を登ると、ピナクルの連続した岩稜に出る。ここから先は容易なはずなのだが、先に見えるピナクルはすべてベルグラの下であり、これの一つ一つ越えて行くにはかなりの時間をくいそうなので、生井と相談の結果、岩稜を1ピッチ登ったところで右のルンゼに40メートルほど懸垂下降する。ルンゼ内はクラストしており、快適に80メートル登って再び岩稜に戻る。さらに雪壁と岩稜を100メートルで登攀終了となった。帰路は極楽平から千畳敷ホテルを目指してまっすぐ降りると10数分で着いてしまった。

10数年前の正月、登れなかった極楽尾根も片付き、私の山日記からまた一つ、課題が消えた。

3月7日 千畳敷ロープウェイ駅 10:25 - 宝剣山荘 11:25~35 -
取り付き 12:05~25 - ビパーク地 15:50

3月8日 出発 6:40 - 終了 11:00~15 - 千畳敷 11:30

(本図 記)



古賀志山 I N かんさいべん

92. 3. 8

パーティ I 佐藤文則 他2名

3月8日の日は、山に行こう思うてあけとってんけど、ACC-Jの人は、都合のいい人おらんくて、誰かおらんやろうか思うて、WVの人に電話したら、先輩が暇やいうことやったんで一緒に古賀志に行くことにしたんよ。

セリカちゃんに乗かって僕と、先輩と、先輩の彼女で、僕と同級の女の子との3人で、出発したんや。宇都宮までは、道も間違わんと行ったんやけど、市内でわからんようになって、しばらく無駄に走り回ってやっとこさでわかる道に出て、自動販売機のところで一服したわけやけど、ここにあったダイドーのダッチコーヒーっちゅう缶コーヒーが、めっちゃうまくて、僕はうれしかったんや。缶のくせにブラックで結構生意気やねんけど、マジにうまいから、飲んでみたらええ思いますよ、オススメ。

で、それからすぐに登山口に着いて、誰かおるかな一思いながら登っていくと不動滝にはまだ誰もおらんと、左フェースに1パーティのみで、うちらは右に取り付いたんよ。先ずは一般ルートかな、とも思うたんやけど、その隣の5. 8+のルートがボルトの連打になっと思って、いけそかな、思ってやってみる。

最初の一本目は楽にいったけど、次が苦しくてOUT。前傾のこまかいホールドに耐えれなくて、あかんわ。しょうがないからそのまま一般ルートに移って、こっちは簡単に登って、TOPロープをセットして、みんなでこれ登って、5. 8+にロープをセットし直して、再TRY。これが午前中の課題や思ってやったら、一発や。飛びついたりして、ちょっといんちきくさかったけど、とりあえず登った。この後先輩も登って、女の子が挑戦したけどあかんくて、それでも意地悪して降ろしてやらんと、しばらくのぼらしとってんけど、やっぱりあかんいうて、断念。ここで、人も増えてきたし、腹も減ってきたから、お昼。ゆっくり食べて、ひとが登っとんの見て、じゃあ次は5-やってみよってことになって、いざ出陣。

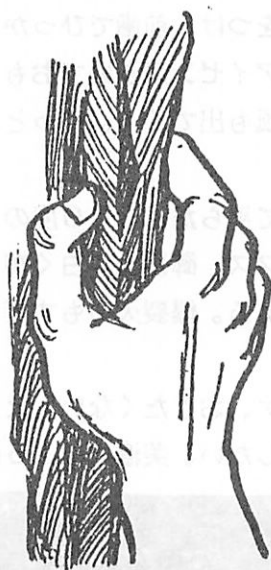
大きめのクラックのルートで、楽勝楽勝思いながらいったら、ハングの下でパニック。体の向きを変えるのが、おっかなくてはずかしながらA0でクリアー。フリーの人が多いのに、ほんま恥ずかしかったわ。ここでロープをセットした後、

僕はお昼寝、zzz。悔しくて、目が覚めてからもう一度やったら、今度は楽勝。やっぱりトップは緊張するなあと思いながら、そろそろいい時間やったから、まあちょっと早目やったけど帰りはじめたんよ。車の前で鍵を探したら、なくてピーンチ思うとったら、なんと、車についとった。なんちゅうこっちゃと思いながらも、みんなええ人やなあとかいいながら帰途についた。

つくば発 6:30 - 不動滝 8:30 - 登攀開始 9:00

(4級、5.8+、5級) 終了 15:30 つくば着 17:30

(佐藤 記)



冬の硫黄岳に登る

92.3.11

パーティ L 川上浩史、笹沢ひろみ

川上君おすすめの硫黄岳に登った。春休みということで、平日休みの多い私につきあってもらう。21時の勤務を終え23時土浦出発、美濃戸口へ。

翌朝6時出発。4駆だったらなアと思いながら1時間歩き山荘へ。人の気配がまったくなく静かだ。小休止後、川上君にややおくれをとりながら、だらだらと林道を歩く。道はトレールができていて歩きやすく、天気も快晴。明るく開けた河原では、雪が太陽の光を受けダイヤモンドのようにキラキラまぶしく、雪盲になりそうだ。ときどき正面に険しい岩峰が見え始める。

森をぬけ、赤岳鉱泉9時到着。雲ひとつない真っ青な空に大同心、小同心の切り立つ岩峰が雄大だ。そして赤岳、阿弥陀岳の展望も素晴らしい。鉱泉で大休止し、ジョーゴ沢を渡る。時々右手に展望が開けるが、すっぱり森の中でジグザク急登する。途中よりアイゼンをつけ、前歯でひっかけて木につかまりながら、近道のため直登したりもした。アイゼンがきいておもしろいように登れる。ようやく森林限界をこえる。同時に風も出てくる。やっと稜線に出た。雪がとばされ茶色の岩肌を見せる。

山頂11時50分着。広くて平らだ。360度のパノラマを前に胸がいっぱいになる。遠くに中央、北アルプス、御岳山が白く輝く。目の前には横岳、赤岳、阿弥陀岳と連なり、高度感がある。爆裂火口もすごい。山頂では紅茶をわかし、昼食をとる。

そのあと「もったいないなア、おりたくない」という気持ちをおさえ下山。充実した山行で、川上君に感謝したい。美濃戸口15時45分着。



(笹沢 記)

雨の八ヶ岳

92.3.15

パーティ L 川上浩史、中居康展、高木均、鈴木操

何年ぶりの八ヶ岳は残雪の三月だ。メンバーは高木、川上、中居、そして私の四名が夜の土浦を出る。いつものコースを中央道に向かう。私には今回二つの楽しみがある。まず車内に医者のおや博士、大学院生と専門分野でレベルの高い？ 会話が期待できる。渋滞が気にならぬ討論は悪くない。第二の楽しみはハム仲間の出合が有る。最近の声仲間で八名のパーティが前日に入山している。深夜の中央道は議論白熱！！ ライトが揺れ黒い林が見えると林道である。道は氷状の線路。美濃戸山荘が見える広場に駐車。テント三名、私が車内で仮眠を取る。夜空は星もなく、明日が心配だ。

「鈴木さん出発ですよ」窓を叩く音で目を覚ます。温かいスープが今日のエネルギー源と思い、十分に餌を食う。各自ザイルを持ち、曇空の南沢を登る。単調な山道はツルツルの氷だ。不調の高木さんは視界から消え、後に人影がない。時折、下山する人の挨拶が静寂を破る。フキ出る汗が体調の悪さと体力の衰えに自分が情けない。昔、冬の八ヶ岳を跳び回った時代が懐かしい。冷気が一段と増し、行者小屋の赤い屋根が見える頃、先着の二名が汗を拭いていた。

無線でコールすると「ハァーハァー」言いながら答えてくれる人が居た。北峰リッジに取り付く前の食事を小屋の中で済まし、川上、中居が先発する。霧が濃く、稜線は風も強いとの無線情報で私と高木は待機する。暫くして戻ってきた二人の話では、ホワイトアウトで取り付け点が判らず無理とのこと。今回は断念する。一日違いの悪天が悔しい。八名のグループがオバタリアンと共に小屋に入ってきた。その中に無線機を持った一人を見つけ声をかけると目的の女性だ。ウワァー初めましてエ！！ 握手、握手。細身で小柄の彼女と再会を約し、我らは下山する。一段と乳白色が増す林を下る。登りでは使わないアイゼンが効果的だ。

アフターの温泉とビールに四名の下山家の足が跳ぶ。新設のモミの湯温泉で汗を流し、八ヶ岳を去る。アー私は満足、満足。

(鈴木 記)

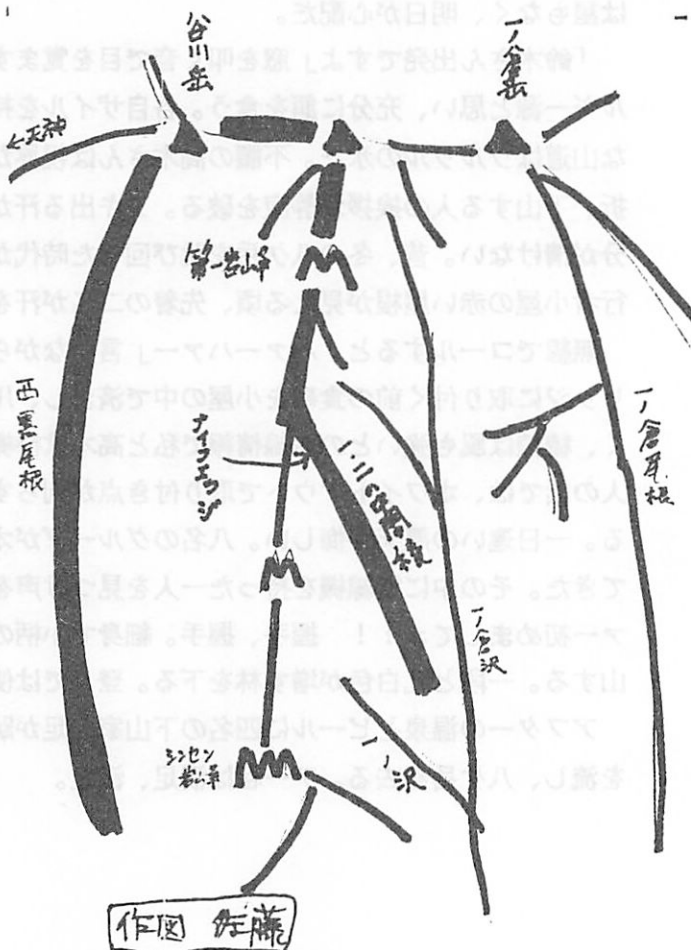
谷川岳一の倉沢、一の沢・二の沢中間稜

92.3.20

パーティ L 所繁、川上浩史、佐藤文則

風邪とアレルギーと運動不足（丸丸2ヶ月山へ行っていない）とで、今日の山行は少々心配である。いつもならすぐ止まる鼻水も今日に限って止まらない。畜生め、こんなことを考えながら林道を歩くと胸までいたいような気がした。病は気から。こんなものなんでもないと思いながらもやはり気になる。今日は林道が長い。一の倉沢出合。とりあえずここまでは来た。しかし今日の行程は長い。しかも取り付いたら上に抜けるしか道はない。悪化したらどうしよう。登れなかったらどうしよう。最悪の事を考えてしまう。今日はよしておこう。所さんにその由言う。しかし励まされてしまった。大丈夫という言葉に私は弱い。じゃあ行ってみますかと行くことに決めた。

取り付きから急登である。先行パーティのやや小幅なステップに、所さんはやや狭いらしいが、佐藤には丁度よいくらいの幅である。足を合わせてガンガン登る。TOP川上、MID佐藤、LAS所の順である。傾斜は全然ゆるくならず、とにかく登る。あっという間に汗だくだ。しかし、新しいピッケルは快感だ。何ととっても自分のモノである。借り物でない自



分のモノ。自然と愛情も湧いてくる。何でもっと早く買わなかったんだろう俺は。大変満足である。さあどんどん行こう。

どうやら先行さんが見え始めた。下山を始めたらしい。女性（素人らしき）2人と男性1人の計3人のパーティだ。女の人が遅かったらしい。よし、これからはもっとスピードUPだ。待ち時間がない分早くなる。行ける。今日中に抜ける。気合い一発、ソレ行くぞ、ヤレ行くぞ！ うーんまた先行だ。男性ばかり3名くらいだ。とりあえず追いついちゃえってなもんで、追いついちゃった。そしたら4人パーティで2人ずつザイルを組んでいる。抜くにも抜けねーし、順番待ちか。ここらが核心部かなと思うと、核心部手前の岩場だという。

ちょうど無線で本図、中居パーティと通じる。所さんが彼らを発見。僕は見つけた心づもりが勘違いのようである。向こうは核心を終え、あと一息だということである。いいなあー、こっちはこれから一苦労も二苦労もありそうだ。交信の後、まだしばらくはそのまま待ちである。核心の岩場とナイフエッジで時間がかかっているらしい。加藤文太郎をまねた小魚と豆の菓子をどんどん頬張る。バリバリ食う。チョコレートの菓子も食う。結構満腹感がある。これはいい。

さて出発。急な下りが多少おっかないが、踏み跡をたどれば核心部も怖くない。先行さんありがとう。でも道を探すのは楽しいから、早くTOPで行けるように



下部ブッシュ帯を登る、所隊長

なりたいなどと思いつつ岩場を通過。そしてうわさのナイフエッジだが、今年はやや小さいらしい。渡り終わって振り向きざまに川上さんを一枚パチリ。ここからはスラブのような大きな雪の斜面をまたもや急登。でも下とは違いブッシュがないので、そして実際に高いので、すんごい高度感。落ちれない。緊張しながらも先行を目指し登る。途中1パーティを追い抜くも、こっちも息切れ、かなり疲れてきた。でもガンガン行くぜ。なんやかんや言いながら最後の取手、じゃなくて砦とでも言うべき岩峰の基部へ着く。

ここで一息。完璧に腹減った。力が出ない。例の行動食をがんがん食う。気持ち悪くなるんじゃないかと思いつつ、ばかすか食う。ふーっと一息、さあ行くぜ。結局、直登試みるも難しく回り込むことにする。かなり急な斜面のトラバースとなる。一步一步慎重に行く。OK無事通過。

あとは上を目指してガンガン行くのみ。気が付けば周囲はかなり暗い。早く稜線に抜けなくては、必死の思いで後からついていく。上で雪庇を崩しているらしい会話が聞こえる。あと本当に一息だ。来いのかかか。覆いかぶさるような雪を乗り越えたとそこは平だった。

やったぜ。さあこれで寝れる。ここでヘッデンを出し、ガチャ類を少し片付け、肩の小屋へ向かう。幸いにもガスは出ていない。しかし僕にはもうPOWERがない。得意の裸+頂上の写真を撮る気にもならない。それ



ナイフエッジを行く、川上

になんとか夜、しかも谷川の頂上は気持ち悪い。何も言わずに先の2人を追う。おー小屋が見えた。小便したいぜ。小屋の中で、結局風が入ってくるが外よりはましという中で、お茶。あー幸せ。所さんから握り飯をもらう。あー有り難や。僕はもう眠い。死にそうに眠い。明日雨だろうが何だろうが今日はもう寝たい。冬山の鉄則は午後3時までの行動だ。俺は寝る。ザックの上で仮眠。スースー。無線はうまく通じないらしい。あー早く寝たい。えっ下りるんですか。本気で。えーっと思いつつ所さんには逆らえない。ぶつぶつ言わずに思いながら下山用意。

くそー死ぬ気で下りてやる。本当に転んだ。穴に足がとられた。くそー、と思っていると本当に転んだ。今度は純粹に滑った。やべー、滑落停止しなきゃ。所さんが飛びついてくる。こりゃ本気でまずいや。早く止まれ。今度は慎重に足を運ぶ。でもへとへと。おー樹林帯だ。おーヘッデンが消えていく。先ず所さんのが、そして佐藤のが、残るは川上さんの1つのみ。でも月明かりで結構明るい。所さんについてしり制動で下りていく。うーん気持ちいい。楽しいぜ。さっきまで鬼に見えてきた所さんもここまでくれば普通の人だ。あれっ、川上さんがいない。ずいぶんズレた所で声がする。向こうにも踏み跡があるらしい。別々に下りる。あれっ変だ。僕たち二人が間違っただけ。

なんとかリカバリーして合流すれば、そこはもう指導センターのすぐ裏。アイゼンをはずし、握手をして車へと。ビールをもらった時には雨が降りだした。。ここまで来れば所さんが神様に見えてしまう。あとは片付けして、ビールを飲んで、僕は一番におやすみなさい。他の皆さんが後何をしていたのかは知らないが、翌朝ワインの空きビンが一本、その他モロモロ有り。

(佐藤 記)



積雪期の一の倉沢は、12年ぶりである。幽の沢パーティと別れると、過去の登攀が思い出され、いつの間にか自分の登ったルートを目で追っていた。複雑な想いが交錯する。わたし流のあいさつを終え、これから登ろうとする一・二の中間稜に気持ちをきりかえた。

今回は、冬合宿でおなじみの大学生トリオである。佐藤は、カゼ気味であったがせつかくここまで来たのだからと無理につれ出した。取り付きはすでにトレールがあり、我々も後を追うように歩き出す。しばらくすると、尾根がやせてきたのでザイルを出しスタカットですすむ。途中、三人のパーティと合流するが、時間切れのため下山するとのこと。我々はもう一つ先行するパーティに追いつこうとスピードを上げる。馬の背リッジと呼ばれる3ピッチ手前で追いつき、以後、後を追う形となる。楽しみにしていた馬の背リッジは、雪の状態が違うのか二本足で通過する。最後の岩峰も右に回り込み、一步一步慎重に足を運び、稜線にはい上がったときには、あたりは暗くなっていた。さっそく懐電をとり出し、二人を迎え、握手をする。そのままザイルをつけ冬期小屋で一服。交信タイムであるが、連絡がつかず、8時30分に小屋を出る。攀じれた喜びからか、長くて暗い西黒尾根も苦もなく下れた。車には、すでに幽の沢パーティが待っていてくれ、夜は遅くまでビールとワインで話がはずんだ。

(所 記)



幽ノ沢、石楠花尾根

92.3.20

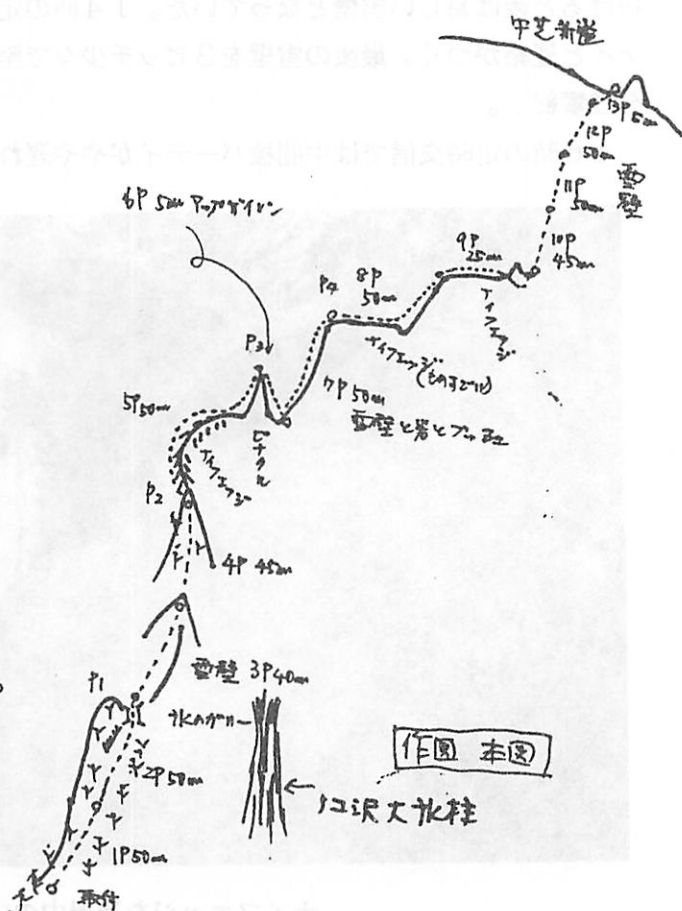
パーティ L 本図 一統、中居 康展

今回は高田さんのリタイヤもあってパーティ構成が二転三転、なんだかんだで私、中居は本図さんとザイルを組むこととなった。前夜9時に一ノ沢二ノ沢中間稜に行く所さんのパーティと下館に集合したのだが、忘れものなどがあって結局出発したのは10時過ぎになってしまった。

天神平ロープウェイの駐車場に着いて3時間ばかり仮眠をとる。6時頃には明るくなってきた。空は高曇り、天気予報では今日一日はもつとのこと。なにしろ私は谷川岳東面を登攀するのは今回が初めてなのだ。予定では1ヒバークになりそうなのだが軽量化でシュラフを抜いてしまった。天気が良いことを切に希望する。

6時過ぎ、駐車場の料金を取られないうちに出発する。雪は締まって歩きやすい。一ノ倉沢出合いで所さんのパーティと別れる。どうやら中間稜は2パーティほど先行しているようだ。一方幽ノ沢へは古いトレールが残っているだけで今日は我々のパーティだけらしい。「いまどき冬壁なんて」という本図さんのぼやきがわかるような…気がした。

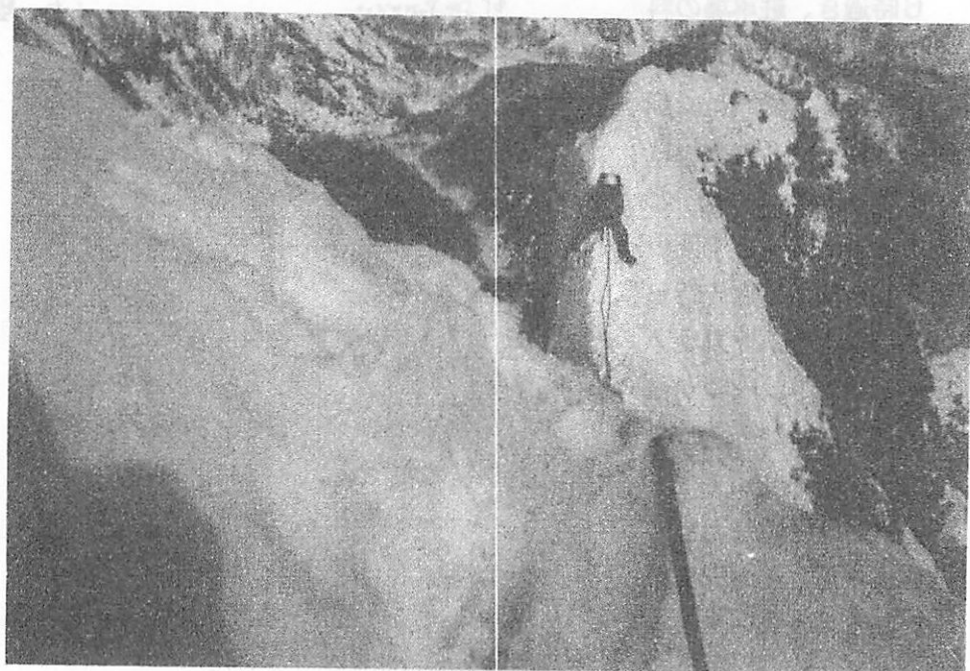
7時半に幽ノ沢出合い



に着く。アイゼンを効かせてぐんぐん高度を稼ぐ。石楠花尾根の取付きには1時間半程で着いてしまった。この頃から晴れ間がのぞくようになった。ザイルを着けて登攀開始。本図さんのリードでスタカットで登る。最初の2ピッチは木登り。3ピッチ目から雪壁も出てきたけれど雪稜登攀とはとてもいいがたい木登りピッチの連続である。おまけに天気が良くて暖かいのでヤッケもザイルも泥だらけ。本図さんの一張羅も汚れて御機嫌斜めのような。5ピッチ目でやっとナイフエッジが出てきて気合が入る。高度感がすごい。ここでピナクルを懸垂下降。12時の定時交信だったのだが入感なし。ここから見る中間稜はとても人が登る所とは思えない。

1ピッチ木登りすると今回の核心部であるナイフエッジだ。本図さんが馬乗りになって越えていく。途中の確保条件が悪く、トップもセカンドも滑ると止められるかどうか。なかなか緊張するピッチである。ナイフエッジを3ピッチ程で抜けると後は易しい雪壁となっていた。14時の定時交信でようやく中間稜パーティと連絡がつく。最後の雪壁を3ピッチ少々で堅炭尾根に抜ける。15時25分登攀終了。

16時の定時交信では中間稜パーティがやや遅れ気味のような。なんとか安全



ナイフエッジを通過中の中居

地帯まで抜けて欲しいと思いつつ下降にはいる。我々も最初は一ノ倉岳を經由して西黒尾根から下降することを考えていたが、雪の状態から芝倉沢の下降も大丈夫そうなのでそこを下る。芝倉沢にはスキーのシュプールが2本あるのみで静かである。機会があればスキーでここに来たいものだ。芝倉沢出会いまでは1時間もかからなかった。ここからはいくらなんでもトレールの一つは残っているだろうと期待したがスキーのシュプールが続いているだけ。結局所々膝までもぐる雪をラッセルして進むことになった。最後の方では謎のトレールに惑わされてえらく体力を消耗した。20時25分、駐車場に到着。本図さんと握手をかわす。疲労で完登したという気分があまりしない。中間稜パーティはまだ帰ってきていないので心配だ。22時までに帰ってこなければピバークしたんだろう、と回線をオープンにしてラーメンを作りビールを飲む。22時前にデリカの窓を叩く音。何とか無事に帰ってきたようだ。よかったよかった。

この頃から雨が降り始め、朝、目が覚める頃には雪になっていた。本当に昨日一日で突破できて良かった。この後は、所さんの口利きで東電の保養センター（だったかな？）で朝風呂+ビールという最高の組合せを楽しむ。いい気分での帰路についた。

(中居 記)



最後の雪壁を登る本図

とりあえず”赤岳西壁主稜”の記録

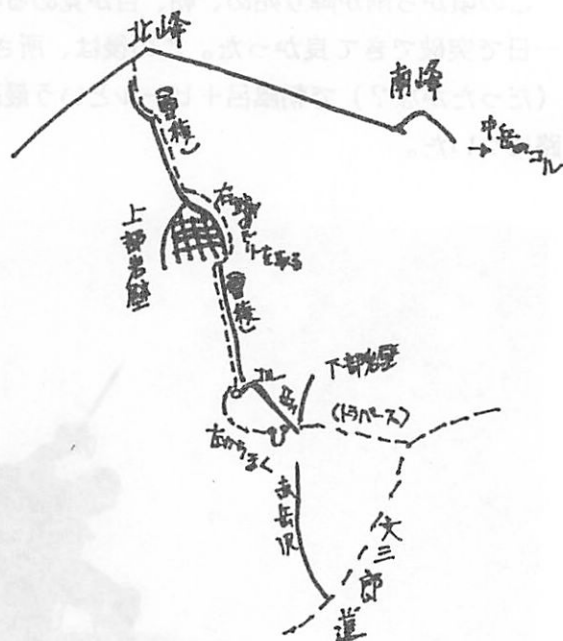
92.3.28~29

パーティ L 高田暢年、原田真由美

またまた来てしまいました。原稿依頼が……。どうも私は、原稿提出の遅さでは当会No.1だそうです。実は書きたくないのです。私は記録など残したくて山に登っているのではないのですから……。少しでも下界を離れ、実生活を忘れて、その時その時の感動を味わえば十分なのです。しかし、当会の原稿取り立て屋は鬼のような人物です。「原稿を出さないのなら山に行くな！出さなけりゃ一緒には山に行かない。」と私を責めるのです。それもわざわざ自宅に電話までくれて……。山に行けないのは困るのです。かといって、臆病な私には「勝手に一人で行くからいいよ。」

とも言い返せません。今こうしている間にも、催促の電話のベルが鳴るのではないかとビクビクしています。それでは、提出日を明日に控えているので執筆作業に入ることになります。

几帳面な私は、まず下書きをします。この几帳面さが提出遅れの原因なのではないでしょうか。今回の場所は八ヶ岳、赤岳西壁北峰リッジ。岩壁部分が僅かで、技術的には易しい人気ルート……。と、たったこれだけの知識で出かけた私がバカでした。どこが易しいの？ ベルグラになっていて登れないじゃないの。・。斜面はクラストして



赤岳西壁 北峰リッジ

作図 高田

危ないじゃない。誰よ！誰でも登れるなんて言った奴は・・・も一頭にきた！
どうして・・・おっと、隠されている性格が出てきそうなので少し頭を冷やして・
っというわけで、今回は写真でページを埋めてもらいましょう。すばらしい景色と、美しい顔を拝んでもらって今回の記録としたいと思います。??? と
ここで写真はどうしちゃったの。この時の写真を私はまだ見ていない。写真係さん、私を写してくれたのでしょうか。これでは私の原稿が仕上がらないのですよ
・・・仕方がないので真面目に、この時の記憶を取り戻す努力をします。

車で現地に着いたのは28日AM1:00。美濃戸口からここまでのガタボコ道を思いおこしながら仮眠に入る。ここは美濃戸山荘の駐車場だ。まったく喜ばしいことである。ここまで車が入るということは・・・目が覚めると快晴とはいかないが、まあまあの天気である。6:30行者小屋目指して出発。滑る。出発してすぐ樹林帯に入るが、道がアイスパーンとなっている。延々と続くようだ。



ピレー中の美女、原田

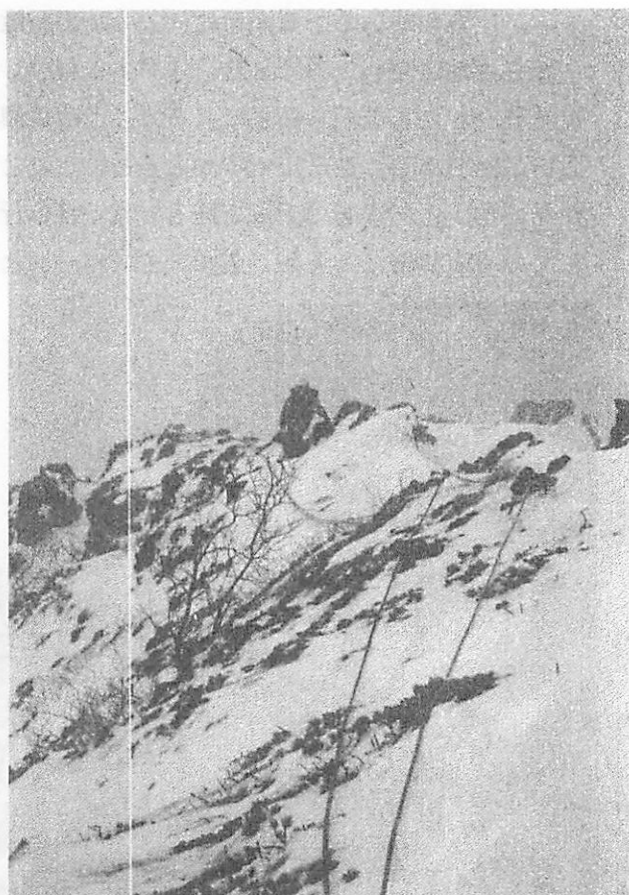
早々にアイゼンをつける。まったく、下界から離れずしてこれでは先が思いやられる。汗に気分を害されながら行者小屋に着くとまず一息。疲れた。ツェルトを張り、10:00出発。本日は易しい北峰リッジだ。2時には頂上に立てるだろう。文三郎道をだどり、途中から左の赤岳沢に入る。それにしても取り付け点が高い。文三郎道をヒューヒュー歩きながら、もしかしたらこのまま頂上に着いてしまうんじゃないかと思った頃、ようやく取り付け点である。11:30登攀開始。易しいということでまず私がトップに行く。易しくない。目の前の垂直な凹角を登るのは明らかだ

がいやらしい。1～2m登った所でバトンタッチ。やはりトップはリーダーに任せるべきである。リーダーは「ちょっといやらしいな。」と言いながらもグイグイをザイルを延ばす。まったく頼もしいリーダーである。それにしても私は騙された。どこが易しいのよ。その後もトップのバトンタッチを数回繰り返し、私は5時すぎにやっと頂上に立つことができたのである。17:20下山開始。18:00行者小屋着。まったく下山は早いものである。長い時間必死になって登った所も数分で下ってしまうのだから。その晩は、たっぷりお酒を飲んで明日の山行に臨んだのである。

しかし翌日29日は朝から大雪。私の願いが天に届いたのか、結局そのまま帰りの途についたのである。

まったく大した記憶力です。何の記録かさっぱりわからないことでしょう。しかし北峰リッジからの景色はすばらしかったのです。雪の付いた赤岳の頂上に立った時には感動したのです。私は物書きのプロではないので、その感動を文章にする事ができないのです。とりあえず、これは八ヶ岳・赤岳西壁主稜の記録ですので、よろしく。

(原田 記)



主稜上部の登攀

東北山スキー放浪記

92.3.29~4.4

パーティ 中居 康展(単独)

今年度の実習はまず秋田で始まるので、ついでにといっちはなんだが以前から行きたい山域であった岩手山、八甲田山、岩木山をスキーで滑ってしまおうかなと思っていた。幸いにして盛岡には友人のM氏が住んでおり、宿泊の方も何とかかなりそうだ。更に大学のW.Vクラブの先輩からの誘いで一緒に岩木山を滑ろうということになった。実習が始まるまで春休みは十日余り、実習は二週間、ほとんど一カ月の旅になる。期間が長い分だけ心配事も多い。まあ何とかなさ、と我が愛車ジムニーで夜の東北道を北へ向かった。

その1. 岩手山 焼け走り～山頂(ピストン) (3/29)

朝4時半、アラームの音で目を覚ます。昨日は筑波から500キロを走ったあと、安比でスキーという強行軍のおかげで体の節々が痛い。もっと眠っていたいが意を決して出発する。まだ薄暗いがどうやら今日も快晴のようだ。天気予報では午後から曇り、夜には雨とのこと。どんな山でも天気が良いに越したことはないが、今回は特に単独でもあるし条件が良い方が安心だ。

真っ青な空の下、真っ白に雪化粧した岩手山が浮かび上がっている。あの焼け走りの大斜面を滑ると思うとそれだけで顔がにやけてくる。焼け走りの標識に導かれて車をすすめる。登山口らしき切り開きの前に車を止めて準備をしていると何台もスキーを積んだ車が通り過ぎていく。ちょっと不安になったがここからでも大丈夫だろうと出発した。(実はちょっと行ったところに駐車場があったのだ。)

今朝の冷え込みで雪が堅くシールの効きが甘い。2P目の樹林帯はやぶっぽくて苦労させられた。下りでも面倒そう。樹林帯が切れ始めたころから風がだんだん強くなってきた。おまけに山頂付近には雲までかかってきたではないか! 雪も相変わらず堅いし、ここから先は無木立の斜面だ。シール登高をあきらめてアイゼンをつけて登る。

先行していたパーティはとっとと下り始めた。もしも下の景色が隠れるほどガスられるようだったら下りようと思いつつ黙々と登る。アイゼンは効くところでは効くのだが、ダンゴになるところもあって面倒臭い。1時間半も登っただろう

か、風がだんだんゆるんでおまけに山頂付近の雲も消えてきた。この調子なら山頂まで大丈夫そうだ、と思ったがいかにせん山頂直下の岩稜帯はちっとも近付いてこない。いいかげん肩の荷物＋スキーが苦痛になってきたところに岩稜帯に着く。ここから先は頂上もすぐだろうと荷物を全部デポして空身で駆け上がる。すぐと思ったら大間違いで実に30分もかかってしまった。風が少しあるくらいで見通しは良好。どこかの大人数パーティがやってきて山頂は賑やかになった。さすがに空身は不安なので10分と待たずに下り始める。どうも単独だと山頂に未練がない。あっというまにデポ点につく。かなりの斜度だ。準備の途中でアイゼン袋を落としてしまう。滑落したら止まるかなといった斜面だ。それからは慎重に準備する。

さて待望の滑降だ。上部は30度以上の急斜面。シュカブラが強く、まるで洗濯板の上を滑っているようだ。ジャンプターンを交えて慎重に下る。200メートルほど下ると新雪が堅いバーンの上にのった状態で実に滑りやすい。最高の気分だ！！4時間半の登りの苦勞も吹き飛んでいく。バーンがあまりに広くて下っているという実感が無い。いくらターンを切っても下に見える樹林帯がちっとも近付いてこないのだ。樹林帯からスキーデポ点まで2時間の登りを10分で滑ってしまう。この刹那性がたまらない。

しかし快適な滑りも樹林帯まで。登りで心配していたとおりヤブこぎのあまりのしんどさに不本意ながら最後はスキーを背負ってしまった。溶岩流のところでは再びスキーを履いたが雪の重いこと。雪に隠れた溶岩でスキーには傷がつくし、いかにも山スキーらしい終わり方だった。

焼け走り 6:30 — スキーデポ点 10:30 — 山頂 11:00～11:05 —
スキーデポ地点 11:15～11:25 — 第二噴火口 11:35 — 焼け走り 12:40

その2. 八甲田山 酸ヶ湯～小岳～高田大岳～猿倉 (4/1)

居心地が良かったので結局盛岡に4泊もしてしまった。今日の天気は晴れのち雨だ。急げば1本滑ることは十分可能だろう。ということで朝4時に盛岡を出発した。青森経由で4時間ちょっと、冬場は閉鎖されている道が多く遠回りを強いられる。8時過ぎ、という山に登るには少々遅いかなといった時間に酸ヶ湯に到着する。

何といっても八甲田山は初めてなのでまずは情報を仕入れることが先決だ。温泉のカウンターの人もツアー客に慣れているようで、まずここで2万5千地図でできているガイドマップを手に入れる。話によれば思ったよりも山としての規模は大きくないようだ。今日一日でもかなりのルートをこなすことが可能そうなので速攻で出発することにする。最初の予定では酢ヶ湯から八甲田大岳ピストンを考えていたのだが、欲張って高田大岳まで足をのばすことにした。ここで失敗したのが、朝飯を買っておくことを忘れたことだった。なにしろ青森県ではコンビニが少なく、早朝に車をとばしてくると買う場所などないのである。しまったと思いつつ僅かな行動食ののこりとチキンラーメンで今回はしのぐこととする。

9時まえに出発。樹林帯で見通しは良くないがトレールがぼつちりついているので迷う心配はない。1時間半ばかりで仙人岱ヒュッテに到着。想像以上に良いペースだ。岩手山では見た目より山頂が遠くてえらく辛かったが、今回は遠くに見えてもすぐ着いてしまう。休憩もそこそこに目の前の小岳を目指す。僅かに20分で山頂だ。いったんシールを剥がして高田大岳の鞍部まで滑走する。地図上で1キロ位の距離を3分程で移動してしまう。まさにスキーは魔法の板だ。さて最後の登り、高田大岳である。もうすっかり化けの皮を剥がれたモンスターの間をシール登高する。最後は雪が硬くシールの効きが悪いのでつば足で登った。

12時ちょっと前に山頂に着く。静かな山頂だ。今日は平日ということもあるが登り出してからまだ誰にも会ってない。山頂からは遠く下北半島、陸奥湾、岩木山が望まれた。寒いのでとっとと下降にはいる。ところが山頂直下はどうみても這松が僅かに雪をかぶっただけの状態、とても八甲田の三大斜面の一つとは思えない。こりや困ったと思いつつ這松の上をガリガリやりながら滑っていくと、なんとあるではないかちゃんと…一定の斜度で幅はやや狭いとはいえ大斜面が広がっている。古いシュプールは一本きり。大きくゆっくりと大斜面に落書きをする。南面ということもあるだろうが雪質はやや重いがまあまあ快適である。まっすぐ滑っていくと谷地温泉だ。なんとか酢ヶ湯までの距離を縮めておきたいので猿倉温泉の方へトラバースしていく。道路に出たが雪壁になっていて飛び下りるようにして道に出る。やっと人の居るところに出た。

今日この道路が開通したということで観光客らしき車が何台も通っている。殆どなんにも食べてないのでとっておきのチキンラーメンを食う。せっかく車が通っているんだからとヒッチハイクしようと思ったが、スキー道具一式が見えるせいか誰も止まってくれない。あきらめて何処か登りやすそうなところからシー

ル貼ってスキーで帰るかと思ったら、今度は除雪してある雪壁が3メートル位になっていてとても登れる雰囲気ではない。結局あきらめてスキーを背負って酢ケ湯までとぼとぼと歩くはめになった。

酢ケ湯では、かのヒバ千人風呂にはいり、飯も食わずにビールを飲んで結局駐車場にとめた車の中で翌朝まで眠ってしまった。

酢ケ湯 8:50 — 仙人岱ヒュッテ 10:15~10:25 — 小岳 10:45~10:55
— 高田大岳 11:50~12:05 — 周回道路 12:35 — 酢ケ湯 15:20

その3. 八甲田山 ロープウェイ~赤倉岳~大岳~箒場岱 (4/3)

4月2日は青森市内では晴れていたが、八甲田山も上の方はすっかり雲に隠れていた。最初っから2日は休日ときめていたので、人と車の飯を補給してから、一日トカゲをきめこんでいた。さて3日である。どうせロープウェイを使うんだからロープウェイの駐車場に車をとめて車中泊。天気予報は、ばっちり当たって大快晴だ。

ロープウェイの発車は9時。平日だというのに結構な混み具合だ。やはりというべきかグレンデスキーヤーが殆どである。今日は八甲田でも最も長い滑走ルートをとれる箒場岱ルートに大岳ピストンを加えた、なかなか欲張りな計画だ。ロープウェイの山頂駅をでると、あれだけいた人があっと言う間に見えなくなってしまう。さすがに自然の包容力は大きいものだ。箒場岱を目指す家族連れが1パーティーだけで、またまた静かな山旅となった。赤倉岳の上部は風が強く所々スキーを外す。このまま滑って終わりにしたい気もするが、ぐっところえて大岳ピストンのために井戸岳を巻いていく。井戸岳はその名のとおりの火口が井戸のように窪んでいる。ここも道松が所々でていて、最後はスキーを担いで大岳ヒュッテまで下る。ここから見る大岳は結構高そうだが、空身でほとんど走って登ると、ピストンに要した時間は僅かに20分であった。

大岳ヒュッテからは井戸岳の東面をトラバースしていく。赤倉岳の大斜面が見えるのだが、シール登高していても雪の悪さはよくわかる。無理して登っても、たいして滑りは楽しめそうもないので、途中でシールを剥がして滑り出した。雪は相当に重いが斜面は広くてそれなりに気分はよい。しかし気持ち良い斜面はごくわずかで、後半は雪が重いうえにトラバースに終始して滑りを楽しむなんてと

でもとても…。

いずれにせよスキーを使った下りは早い。7キロの滑走コースも30分余りで滑り降りてしまう。箒場岱まで滑り降りて売店でビールを買う。ちなみにここからシャトルバスがロープウェイの所まで走っているのだ。(谷地温泉の方は走っていない。)気持ち良く酔っぱらい、バスで車のところまでのんびり帰った。勿論、山スキーの後の温泉も忘れずに！ということで谷地温泉につかった。山スキーとはいっても、これだけロープウェイでお手軽になってしまうと限り無くゲレンデスキーという気がした。とにもかくにも山スキーの聖地！？八甲田山を滑れたのだから十分目的は果たしたと言えよう。そしてこの山スキー放浪をしめくくべく最後の目的地、弘前へと向かった。

ロープウェイ山麓駅 9:00 — 山頂駅 9:15~25 — 大岳ヒュッテ 10:50~11:00
— 大岳 11:15 — 大岳ヒュッテ 11:20 — 井戸岳東面 11:35~45 —
箒場岱 12:25

その4. 岩木山 百沢スキー場～山頂～弥生 (4/4)

朝7時前、弘前のバスターミナルでW.Vクラブの先輩を待つ。今回の放浪をしめくくするのは津軽の秀峰岩木山だ。で、ここを滑ることにしたのも先輩の誘いがあったからのようなものである。高速バスが5台ばかり到着する。とっくに就職してしまった先輩の懐かしい顔がみえる。考えてみたらH先輩なんて下界より山で見ることのほうが多い。M先輩は東京で山岳会にはいつているそうで相変わらず黒い顔をしている。

3人分の荷物を積み込むとジムニーはぎゅうぎゅうである。天気予報では今日は晴、明日は下り坂ということで、天気のいいうちにさっさと滑ってしまうことになった。百沢スキー場は動いているリフトが2本だけというとんでもないスキー場で、土曜だというのに車が5, 6台しかない。まあここで滑るんではないから関係ないが、こんなので採算がとれるのだろうか。

のんびりとパッキングして9時半頃出発する。山スキーでシールを付けていると、リフトで降りるときがおっかなくてしょうがない。こんなときはスキー客がいなくて良かったと思う。3人でちゃんたらお喋りでもしながら登る。やっばりのんびり山スキーは皆で行ったほうが楽しい。南斜面ということもあるが雪がだん

だん腐ってきた。この調子でいくと、またひどい滑りになるなと思いつつ登る。とくにM先輩は山スキーは初めてだそうだ。あんまり酷い目にあうと山スキーが嫌いになってしまいますよ、などと言って先輩をおどす。一方のH先輩はW、Vでも山スキーの先輩にあたる。こちらは今流行の？テレマークスキーで登っている。最後はスキーを背負って苦しい急登、所々足がはまって大変だ。後ろから一人登っていたけれどこちらには来ないようだ。誰もいない山頂である。目の前に日本海が、背後には昨日滑った八甲田山が見えた。単独行だとここでシールをはがしてとっとと下ってしまうところだが、何人もいるとお茶でも沸かして記念写真でも撮るかということになる。ちなみに岩手山、八甲田山ともにカメラを持っていかなかったため写真は全くのこっていない。

のんびりしていい加減体も冷えてきたので下降にうつる。山頂から一山巻いていくと今回滑る弥生コースの全貌が見える。大黒沢の源頭部は素晴らしい大斜面になっている。これほどの大斜面は岩手山くらいしか今まで滑ったことがない。おまけに全然期待していなかった雪質も想像以上に良い。残っているシュプール



も僅かに2本。岩木山スカイラインがまだ開通していないから誰もこないであろう。3人それぞれ奇声をあげながら大斜面にシュプールを刻んでいく。さすがに下の樹林帯に入ると雪が重い。まだ時期が早いこともあって沢はほとんど埋まっている。そのおかげでうっとうしい高巻きをしなくて済む。上部では良い雪質に、来てよかったと言っていたM先輩も、悪雪でばたばた転んでいるうちにだんだん無言になってきた。果たしてM先輩がまた山スキーに行こうと言ってくれるかどうか。

最後は、りんご園のなかをスケーティングして道路にでる。これでスキーはお終い。ちっちゃな売店で電話を借りてタクシーを呼ぶと、売店のおばあちゃんが「少々傷があるりんごだけど」といって6個ほどりんごを貰ってしまった。りんごをかじりながら振り返ると岩木山が傾いた西日を浴びて眩しく光っていた。

百沢スキー場 9:30 - 山頂 13:00~14:00 - 弥生 16:30
(正確な記録を取っていませんでした。)

(中居 記)





※編集後記

今年は富士山の雪が例年になく多いと聞く。今まで富士スキー滑降（直滑降ではない）を何回となく計画したが、天気が悪かったり、雪が少なかったり、又ある時は出発直前に雪が降り、道路がストップしたりして、未だに実行されないでいる。今年は行くぞー！！ さて板は何にしよう。下りの快適な滑降のことを思うとやはりゲレンデ用の板と靴にしよう・・・などと今からあれこれ考えている今日この頃である。

「岩と溪谷」もこれで4号になった。ここで新たな問題が生じてきた。ワープロの件である。今まで一部の会員におんぶにだっこでやってきた。小生ワープロのことについては全く無知であったが、ワープロは大変な作業のようである。最初の予定では、何人かに交代で頼もうと思っていたのだが、各個人それぞれワープロを打つスピードが違うのである。ある者は一晩で10数ページを打ち、ある者は2～3日で1ページといったあんばいである。そのため一人にだけ負担が大きくなってしまった。

このままではいけないと思い、現在、業者に問い合わせ中だ。プロに頼む場合は会費を大幅に値上げせねばならない。「会費を値上げするなら会報を発行しなければ良い。原稿も書かなくて済むし。」と言い出す会員も出てきた。でもその考えには賛成はできない。会報は出すという前提の基に何か良い方法を考えるべきである。5号の編集までには何らかの結論を出さねばならない。はたして5号は出るか？

（音菜台州記）

季報「岩と溪谷」第4号 発行1992年 冬

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統 方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
